ドラクエ ある村人の日記 ～ 渡る世間はアレばかり ～

ぺぺロン夢次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラクエ　ある村人の日記　～　渡る世間はアレばかり　～

【Ｎコード】

Ｎ２６０６Ｆ

【作者名】

ペペロン夢次郎

【あらすじ】

ドラクエのある村人は、事故も重なって、勇者様を殺してしまう！！気弱な村人を待っている運命とは！？

冒険の書１　勇者なんかクソ食らえ！！

１０月１日

来週、勇者様たちが村に来ることになった。
勇者様といえば、俺たちの憧れの存在。
他の大陸でも有名だって聞くし、なにより強い！

オレもそれなりに鍛えているけれども
ぜんぜん敵わないんだろうな……
ひさしぶりに楽しみだ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーー

１０月２日

とにかく体を鍛えることにした。
挨拶ぐらいはできるだろうし
そのときに、男として軟弱だと思われたくない。
むしろ褒めてもらいたいかな。

もしかしたら仲間に呼ばれるかも知れないし。
いや、それは絶対ないけれども。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーー

１０月４日

トレーニングのしすぎであちこちが痛い。

筋肉痛になって、超回復して……
筋肉って、ちぎれて再生することで
さらに大きくなるんだよね。
あぁ　もうこれまた強くなったっぽい。

村人だってレベルはあがるんだ、と思う。
たぶん今はまぁそこそこのレベルにはある、と思う。
レベルアップ時は音が鳴る、と聞いているがウソだろう。
このオレが聞いたことないのだから。

ホントに仲間に誘われたらどうしよう。
いやいや、それはない。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一

１０月５日

筋肉痛で動けない。
パソコン打つのがやっとだ。

明らかに腕太くなってる！
これ治ったら、さらにレベルあがるんじゃないかと思われ。
震える。自分に。
もしかしたら、旅に呼ばれるかもしれない。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――

１０月６日

オモテが賑やかになってきた。
勇者様を歓迎する祭りをするらしい。
屋台をたくさん準備している。
みんな浮かれすぎだよ、まったく。

今日もトレーニングしておこう。
こん棒（エキスパート　ｖｅｒ．２．５　）も出しておこう。
実際の装備で実戦訓練しておかねばならない。

しかし、すごい振り。いい感じ。
モンスターもひとたまりもないしょ、コレ。
勇者様にも認められる可能性はかなり高い。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――

１０月７日

いよいよ明日に来るらしい！
今晩、南の町を出るんだってさ。
夜に外を歩いてくるとか！すごいんだけど！！

夜の魔物は、ほとんど見えないから
勝ち目は絶対ないって、死んだじぃちゃんが言っていた。
実際そうでしょ。
一角うさぎの動画とかネットでみたけど、すげー早かったし！

しかも銅の剣とか、あんな重いので倒せるとかどんだけ！？
ついていけるように、しっかり訓練しないといけない。マジで。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーー

１０月８日

今日はちょっと興奮して眠れそうにない。。。

勇者様一行は予定よりすこし遅れてお昼ごろに来た。
まず、剣。
すげー長い！！　超かっこいい！！
あんなのみたことないマジで！！
デザインとか、装飾とか、すごい凝ってる！！

城の警備兵をやっていたサトシさんが言っていたけど
城下町でも、あんなのは売ってないって。

途中でスライムの群れに遭遇したらしい。
しかも一匹、生きたまま捕まえて来てるし。
スライムはじめてみたよ。けっこうデカイ。

それで遅れたようだ。村長がそれを気遣って
「お怪我などはありませんか？」
って聞いたら、勇者様は

「無いでしょ、フツー」

これだもん……
……やばい、こんな衝撃今までにない……！！
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーー

１０月９日

昨日は村で歓迎祭が予定されてたけど
勇者様には先に約束があったらしく
どこかに飛んで行ってしまったので、今日になった。

だけれども今日一日、勇者様たちは宿屋から出てこなかった。
また、本祭は持ち越し。
作戦会議でもしてるのかな……
やっぱり大魔王を相手にしているだけあって
いろいろ忙しいみたいだ。

なので、せっかくお祭りってことで
いつも通り、タツロー達と遊ぶことにした。
もちろんアンジェリーナちゃんも一緒に。

アンジェリーナちゃんは本当にかわいい。
ブサイクな角度がない。ほんとに。
しかも性格もいい。スタイルはこれが、もう、かなりヤバイ！
完璧すぎる。いろんなところが困ってるぜチクショウ！！
タツローは何気ないけど、あれは確実に気に入ってるっぽい。
タツローは親友だけど、これだけは思うようにはいかせない。

ほんと、スキです、アンジェリーナちゃん。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーー

１０月１０日

ちょっと今日はむかついた。
今日も歓迎祭の誘いに村長が迎えに行ったら
「食べたいものが無いからいい」
って一言。

なんだよそれ。
そりゃ城下町と比べれば劣るかもしれないけど
いや、劣らないよ、ぜんぜん。
この村は海が近いから
取れる魚で作るちらし寿司とかは最高にＭＡＸウマイ。

しかも後になって村長の家に勇者様が来た。
「聞いたんだけど　『きえさりそう』　持ってるって本当？」
って、いきなりタメ語で聞いていた。

村長の宝物だ。
若いとき、すごい苦労して有名な旅商人から譲ってもらったんだって。
村の誰かから聞いたんだろう。

「こちらです」
丁寧に応えて、村長が持ってきたら

「うわー出たよ…
これ『きえさりそう』っていう記憶もぶっ飛ぶドラックだよ。
村長のくせに麻薬だすなよな　笑
全然つっかえねーよ！　」

とかみんなの前で言って帰って行った。
態度悪すぎ。

さすがに気の毒になって、励ましに行ったら
「ありがとう。恥ずかしい村長で、本当にすまない」って。
目を見れなかった。

『きえさりそう（偽者）』はどこかに捨ててくれって預かったけど
これは勇者様がいなくなって落ち着いたら、返しにいこうと思う。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一

10月11日
きょうはとんでもないこと　してしまた
かこう　と　おもったけど、やぱり、かけない

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーー
１０月１５日
気持ちが落ち着いたと思う。
整理をかねてここに書く。

４日前に勇者どもは突然この村を出発すると言い出した。
勇者どもは何を考えているのか

「チョーシュー（徴収）だから」

とか言って、みんなの家の中を荒らしまわった。
しかも、最後だから送別会！と今さらに宴会を要求し
それには出てきて、さんざん飲みまくり、宿屋に帰っていった。

その後、オレはクリーニングに出していた布団を取りに
宿屋に向かった。
布団を受け取って、帰ろうとすると
嫌がるアンジェリーナちゃんの手をひく勇者の姿が見えた。
嫌な予感がして勇者の部屋の前までいくと
アンジェリーナちゃんの泣いている声が聞こえた。

そこからは先はよく覚えていない。

入っていって
布団を投げつけて
こん棒（エキスパート　ｖｅｒ．２．５　）を思い切り振り下ろし

た。

それが急所に？
丸だしの勇者のこん棒に当たった。
オレが勢いあまって転がるほどの一発だった。
まさにクリティカル。

勇者は悶絶して倒れたんだけど、
そこに立てかけてあった
大きな剣が倒れてきて……
思い出すのも恐ろしい。

シャン　って音がした。

アンジェリーナちゃんは、ガタガタ震えてて
どうしようもなかった。
とにかくオレはどうにかしないとと思って
血のついた大きな剣を持ってきた布団にくるんだ。
そして、アンジェリーナちゃんをまず外に出した。

そのときに持ってきていた
キエサリソウの存在に気がついて……

これ使えば、今のこと全部忘れられるかもって。
それでキエサリソウの嗅がせると
その場ですぐに眠ってしまった。

で、オレは剣入りの布団をもって帰っていって
４日経ち、今日になる。

すぐに、首が胴から離れた勇者が発見された。
今、村では大騒ぎになっている。
勇者殺しの犯人を仲間たちが血眼になって探している。

「絶対に生かしてはおかない」

っていう言葉が聞こえない日がない。
どうせ殺されるなら自首しないほうがいいよ……

アンジェリーナちゃんが話せば早いけど
まだ探してるってことは、キエサリソウがうまくいったってことだ。

お願い…　誰か助けてください…

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーー
１０月１６日

オレの部屋に、一通の手紙が差し込まれた。

「ころす　みた　あす　４じ　うらもん　こい」

見た瞬間、目の前が真っ白になった……
あまりの恐怖で、手の震えが１時間くらい収まらなかった。
情けない。

だれかが見ていた……??
いや、全員にそう書いて
出てきたやつを縛りあげる罠の可能性もある。
しかし、下手くそすぎる字だ。字なんて呼べる字じゃない。

何されるんだろうオレ……
もしかしたら、そいつの一生奴隷とかになるのかも知れない。
でも、このまま過ごしても、活路もない。
とりあえず、朝４時と夜４時に裏門をのぞこうと思う。

ってかどっちの４時か書けよ……！
ってこんな状況だけど思う。

お願い…　誰か助けてください…

次回へつづく。

冒険の書２　家政婦じゃないのは見た

前回までの村人の日記は……

待ちに待った勇者様だったが
性格最悪！！態度尊大！！
あまりの振舞いにブチ切れて
勇者様を殺してしまった村人！！
震えて隠れる村人へ一通の手紙が！！！
どうなる！？　村人！！

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――
冒険の書２　家政婦じゃないのは見た
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――

１０月１７日

早朝４時。
手紙の指示にあった裏門には行った。
そこには一匹のスライムがいた。
始めはどこから入ってきたのかと、
この村としての危険を感じたが、

どうやらコイツがオレに手紙を書いたらしい。
勇者たちに捕まって村へ来た、スライムだった。

スライムが言うには
勇者たちに「ボミオス」という呪いをかけられ
１０日間は体が自由に動かないらしい。
しゃべるのさえ、不自由そうだった。

「オマエは何をみたのか？」

なにより、まずそれを確認する必要がある。
かなり強めに問いただすオレ。
自由のきかない呪われスライムに恐れはない。
下に見ていた。

「協力できないならバラす」

はっきりとスライムは答えた。
動揺してしまった。一言にだ。
なんとか、ここで冷静に戻らなければならないと
頭を働かせたが、パニックになるばかりだった。
情けなし。オレの強気はどこかへ飛んだ。

『　スカーフをやる。
　村の林　今夜１２時に待つ　』

口から、紙とペンを出したスライム。そのように書けという。
字を書いてもらうのが目的だったらしい。
確かにオマエの字はひどすぎる。

スカーフってなんだ??
とか思いつつ言われるがまま、言うとおりにした。
そしてもうひとつ。

「今夜12時にオマエもこい」

以上、終了。
今朝にあったのはこれだけだ。
とりあえず、これまでを整理する。
まず、今回のスライムの行動について。

手紙を、オレに出してきているということ。
オレを特定できているということは
何かを知っているのは間違いない。

そして現れたのは、スライムということ。
コイツは勇者側ともいえる位置にいる。
勇者の仲間どもが操っているのだとしたら……

いや、オレを特定できているなら
仲間どもが捕まえに来るはずだ。
捕まえに来ないということは
関係していないからか。
スライムは単独と考えていいのかも知れない。

そしてあの紙に書いた文字。
誰かを呼び出している。スカーフを誰かに渡したいらしい。
はっきり言ってそれが何だか，全くわからない。

そして最後に、オレも呼んでいるということ。

勇者の仲間達を呼び出し
探している犯人(オレ)を差し出し
それで自分(スライム)を逃がせと取り引きを行う。
最悪なシナリオだ。

その可能性は充分ある……危険すぎる。まずい。
しかし、言うことを聞かなければ、バラされる。
オレ的には同じことだ。

とりあえず今、警戒すべきは
アイツがしゃべるということ。
しゃべらない保障はないということだ。
他にはない。浮かんでいる打開策はひとつだ。

アイツを
なんとかしないと。

今夜、オレは鬼になる。
第二の殺人。いや、殺スラか。
○田一の殺人鬼の気持ちが分かる気がする。
死スラに口なし。これしかない。

もうすぐ12時。
神様…どうかお許しください。
スライム狩りに行ってきます。

――――――

ーーーーーー

１０月１８日

夜が明けた。
昨晩から今朝にかけて起きていたせいで
異常に疲れた……

しかし、記憶が確かなうちに書いておきたい。

昨晩は１２時に林へ奥へ向かっていくと
そこには勇者の仲間どもがいたのだった……

次回につづく！！

冒険の書３　青い稲妻がボクを攻めない

前回までの村人の日記は……

村へ来た勇者様だったが
性格最悪！！態度尊大！！

ひどい振舞いにブチ切れて
勇者様を殺してしまった、ある村人！！

現場を目撃したという
スライムに呼び出されてみると
そこには勇者の仲間たちがいたのだった！！
どうなる！？　村人！！

――――――

スライムはそう言った。
だれが騙されるかと
振り切って逃げようとした。

「勇者が死んだのは事故だ！」
「君のせいじゃない！！」

スライムの言葉に、オレの足は止まった。
そんな状況で不思議だったんだけど
涙が出そうになるぐらい、なんというか…
ありがたかった。

コイツは真実を見ていたのだった。
苦しかった気持ちが、少し和らいだ。
奴らの狙いはスカーフだといい，
スライムは、口から汚いスカーフを吐き出した。

「これを渡してきてくれ，頼む」

すがるように言った。
完全にハメられたと思っていたが……

バラしてはいないんだなと、確認すると

「死んだ仲間に誓う」

と答えた。
また、もし何かを尋ねられても
「言えない」とか「頼まれた」とか

言えばいい、と言った。
オレはうなずいて、言われた通り、スカーフを渡しに行った。

勇者の仲間たちは、驚きと歓喜の声を上げていた。
「消えろ！！」
と怒鳴られて、オレは一目散に逃げてきた。
もう泣いていたオレ。情けない。

役目は果たした。
もうこれでいいだろと立ち去ろうとしたが、
「見てろ」
とスライムは言い、そのまま二人で離れた茂みに隠れて
様子を伺うことになった。

しばらくは、勇者の仲間たちが歓喜に狂っていた。

が，突然にもその背後が動く。
同時に、杖を持ったジジイが飛び出してきて
その杖を、地面へ叩きつけた。
叩いた地面から、凄まじい勢いで煙が吹き出した。
その時はそう見えた。

当たりは一面、煙に包まれた。
ジジイと思われる笑い声がする。
してやったり的な、嫌な笑い声だった。

良からぬことだろうと、何となく察した。
倒れている勇者の仲間たちから
何かを探している姿が煙ごしに見えた。

煙が晴れてきている。

「使い方は見たな？」

スライムが言った。
その時はなんの事だかわからなかった。
次の瞬間、スライムは消えていた。
いや，正解には消えるような早さで動いた。

あっというまにジジイの背後に忍びより
高く跳ね上がって
真上からジジイをおし倒した。

突然のことで何がなにやらわからない。
スライムはジジイの杖に噛み付き、奪い、
こちらに投げて飛ばした。

「地面へ！！」

スライムは叫んだ。
もがくジジイを押し付けている。
自体が飲み込めないオレはウロウロ。
ださい。

「叩きつけろ！！！」

その言葉に訳も分からず反応し
杖を拾って、それでオレは地面を叩いた。

さっきと同じ。

地面からかと思ったけど
よく見ると、この杖から煙は出てるみたいだ。
すげー仕組み。

スライムはさっきよりも早く、
ほんとにイナズマのような早さで、その場から離れた。
下になっていたジジイも、一歩遅れて逃げようとしたけど
やっぱりジジイの足。おそい。
離れようとしたが間に合わず、逃げながらに倒れてしまった。

煙が立ち込めて……
だんだんと晴れていった。

「木箱を探してほしい」

スライムは戻ってきて、言った。
倒れている勇者の仲間たちの袋の中に、小さな木箱はあった。
木箱の中を確認するスライム。
そしてなぜだか、泣きだしてしまった。
中にはスライムが数匹写った写真と、お守りが入っていた。
スライムにとって、とても大切なものだったらしい。

「すまない」
と、そして
「ありがとう」
とスライムは言った。

それから、スライムの指示で勇者の剣を持ってこいと言われ
その倒れている奴らの近くに置いた。
完全に言われるがままのオレ。

スライムはこれで終わりだと言い，
「あとはどこへでも突き出してくれていい」
と言った。

そんな気にはなれない。
とりあえず、ウチに来ればいいとオレは言った。

そして朝になり今。
スライムは、木箱をくわえて眠っている。
何かいろいろあったんだなと思う。
詳しくは起きたら聞いてみることにする。

そうそう。
帰り道，村の入り口に
お城の兵隊が到着していたのが見えた。
この回の勇者死亡の件で派遣されたものと思われる。
まずいことになった。
スライムはオレがかくまいながら
家の中に入れたから見られてはいないだろう。

とりあえず眠る。
今日の真相はまたあとで聞くことにする。

次回へつづく

冒険の書４　九死に一笑を得て

前回までの村人の日記は……

村へ来た勇者様は性格最悪！！

ひどい振舞いにブチ切れて
勇者様を殺してしまった、ある村人！！

現場を見られたスライムに呼び出されてみると
勇者の仲間たちがいたのだった！！

ハメられたと思われたが、なんだか様子がおかしい！？
何があった！？　村人！！

――――――

お城の兵隊が勇者の仲間たちを縛り，連れていくのが見えた。
どうやら、凶器の勇者の剣が見つかったことで
奴らが捕まったらしい。
また，勇者のスカーフと思われるものも
持っていたからだとも聞いた。

スカーフは、城下街では
預金を下ろすカギになっているものだという。
貧乏人のオレらは知らんぜよ。
そんなものを持っていたこともあり、奴らが
勇者殺しの容疑者として連れて行かれたのだった。

中にはあのジジイもいた。
スライム言わく
ジジイはあの勇者の仲間たちの一人で
魔法使いだと思われる　と。
ジジイが持っていた杖を、スライムは知っているという。
とても珍しい杖で、「眠りの杖」という魔法使い用の杖らしい。

勇者死後、魔法使いのジジイだけは一人で行動し
ずっと仲間たちを付け回していた。
目的はスカーフの独り占め。
横取りを企んでいたわけね。
その手には必ずあの杖を持って行ったらしい。
そして，毎晩，仲間たちが寝たのを確認しては
奴らの部屋をあさっていたそうだ。
浅ましい奴だ。

ここでオレが書かされた手紙が登場する。
その手紙は勇者の仲間たちに渡り、奴らはおびき出された。

魔法使いジジイはそれに気付き、後を追ってきた。

そして夜１２時。日付が変わる。
スライムにかかっていた呪いの件。
前に話していた体が不自由になる呪い。
ボミオスとかいったっけ。

ちょうど１０日目になり呪いが解けた瞬間だった。
スライムも追ってきた。
そしてオレと接触するため、隠れていた。

スライムはスカーフを持っていた。
オレが勇者を飛びかかったあの夜。
スライムもあの勇者の部屋にいたのだ。
タンスに閉じ込められていたらしい。
そこからすべてを見ていたのだという。

そして、勇者の死体を前にある考えへ及んだ。
勇者の仲間たちは、金で雇われていた。
勇者はあの性格で、なにかとお金を強みに
こき使っていたらしい。

莫大な預金を持っていることは、よく自慢していたようで
仲間たちは、そのくせ分け前が少ないと
不満ばかりたれていた。

そこへ勇者が死んだ。
残された仲間たちのすることは……

預金を奪おうとするのでは？

と、スライムは読んだ。
予測通り、勇者の死体を発見した仲間たちは
預金を引き出すスカーフを探しだした。

が、しかし無い。
やつらは剣とともに持って行かれたのだと思い
犯人探しとして、スカーフを探し回っていたのだ。
強欲で浅ましい奴らだ。見つかっていたらと思うと恐ろしい。

スライムは、奪われた木箱を取り返すため。
奪い返すには
この仲間達が1人になる状況を作ること
そして
かけられた呪いを解くこと
を考える必要があった。
さすがに複数人を相手では、敵わないし
ましてや、呪われた不自由な体では無理だ。

そこでスライムはこの計画を練った。
自分の呪いが解けるタイミングを予測し、オレを呼び出した。
オレにおびき寄せる手紙を書かせ、スカーフを渡させる。
スカーフを持った仲間達に、魔法使いのジジイが横取りを図る。

一人になった魔法使いのジジイ。
と
自由な暗闇のスライム。
なるほど。これなら分があるといえるだろう。

頭のいいやつだ。望んだ状況を、見事に作りあげた。

そして魔法使いと同じように
眠りの杖を使い（オレを利用して）木箱を奪回する。
ここからさらに頭がいいスライムは
オレに剣を持ってこさせ、勇者の仲間達に容疑をかぶせた。

お前も助かる　ってそういう意味だったのね。
オレは、完璧に救われてしまった。
ちょうど兵士たちが来たのは
運が良かったとスライムは笑った。

このスライム　ただものではない。

オレはこいつにすごく興味をもった。
（性的な意味ではない）

次回へ続く

冒険の書５　食べたモノが透けて見える君よ

前回までの村人の日記は……

村へ来た勇者様は性格最悪！！

ひどい振舞いにブチ切れて
勇者様を殺してしまった、ある村人！！

しかし、スライムの作戦のおかげで大逆転！！
おまけで村人は救われてしまった！！

――――――

スライムなのに大学とかあるのかよ。高卒のオレ涙目。
兄弟が迎えてにきてくれて、帰省中の惨事だったと。
迎えに来てくれた兄弟が皆死に、自分だけ生き残って
両親になんて言えばいいのかと泣いた。
君だけでも帰って、無事な姿をみせるべきだ
とオレは言った。

しかし帰るにも1人では、帰れないという。
ご存知、村の外にはモンスターがいる。
外をうろつくモンスターとは、モンスターの中でも
俗にいうゴロツキで、野蛮な盗賊みたいなものらしい。
1人は特に危険で狙われやすいというのだ。

兄弟も迎えにきたのもそういうわけか。
友達とかはいないのか？
とオレは聞いた。

近くにいるにはいるけども
そいつが手を貸してくれるか
どうかは分からない、と言った。

行くだけ行ってみたら？

そこまでだって1人ではいけない。

……

ということで、オレも行くことになった。
助けてもらったお礼だ。

実はこう見えて腕にはかなりの自信がある。
スライムにもそう伝えた。

スライムはとても表情が明るくなった。
まぁ襲われてもこのスライム強いし，
オレはサポート的に戦う程度でなんなく済むだろう。
明るいうちを1人ではないなら、危険はそんなにないもんだと
サトシさんから聞いたこともある。

お城の兵隊が帰ったら、村外に出る。生まれてはじめてだ。
ご存知、こんなこともあろうかと今まで鍛えてきた。
今から腕がなる……フフ。
武者震いが止まらない。

行くぜ　相棒（こん棒　エキスパート　ｖｅｒ．２．５）！！

――――――――――――――――――――――――――――――――

１０月２１日

どうやら明日、
お城の兵隊たちは引き上げるとのこと。

もう？思っていたより早い。
勇者の仲間たちの裁判が始まるらしいのだ。

……今事件から免れたオレ。
確かに勇者が死んだのは事故だ。
でもきっかけは間違いなくオレ。

こういう場合、どうなるんだろう……

真実を話したいだろうが、今はタイミングじゃないと
スライムは言っている。とりあえず今は、後に回そう。
それよりもマズイことになった。

明日、村を出発しようとスライムと決めた。
頼りにしている表情を見せるスライムだ。
外はどんなのがいるのか？と聞いたら
「自分が一番小さくて弱い　笑」
と答えた。

今日でこの日記が、最期になるかも知れない。

先日のスライムの動きが思いだされる。
あの圧倒的なスピードに合わせて
俊敏な身のこなし。
スライムとはかなり上の方……
トップクラスのモンスターだと思っていた。
もっと凶暴でもっと大きいのがいるわけだ……。

オレはオンボロアパートの1人暮し。
その中で、数々のゴキブリや蝿となら戦ってこれた戦士だ。
そんなオレの直感が言っている。

出くわしたら死ぬ。確実に。
話が違う。冗談じゃない。
震えと不安と涙と鼻水が止まらない。

どうか，どうかオレを守ってください。

こん棒（エキスパート　ｖｅｒ．２．５）様。

ーーー

ほら、小鳥がこちらに向かって、飛んできている。
歓迎されているのさ　と。
とか思った。最初は。

だんだん近づいてきた小鳥。
と、まもなく。

大怪鳥が上空を通り抜けた。

ぐっちゅぐっちゅのモンスターの死骸をつかんで。

次回へつづく。

冒険の書６　問答無用のサークル・オブ・ライフ

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人！！

お礼としてスライムを帰すべく
協力を買って出るが完全に調子をこいた！！

いざ未知なる村の外へ！！
村人がその一歩を踏み出した！

――――――

「大卒以外のモンスターはしゃべれない」
とスライムは言った。バカか。
大卒とかの話じゃない。なにより高卒のオレはどうなる。
モンスターの格差社会もまた、深刻だ。

文字や言葉を、大学で習うことができるらしい。
ちなみに今から行く友達は
大学の友達だから心配ないとの事だった。

激しく，ついて来たことを後悔したがもう遅い。
こうして日記を書くのも
いつ最期になるかわかったものじゃない。
いつ襲われるか知れない恐怖の中を歩き
夕方にようやく友達が住んでいるという小屋に着いた。
モンスターには遭遇しませんでした。ツイテタ。

その小屋のお友達は、家族で住んでいるらしい。
その中の1人とスライムは、親しげに話している。
うんうん、うなずいているお友達。

スライムの友達はスライムかと思っていたけど、人だった。
ただすこしだけ気になることがある。

こちらの家族、全員、鎧を着ていらっしゃる。
お母さん（と思われる）までも。
やはり、こんな土地で暮らしていくには、武装が欠かせないのだろう。
過酷な土地だ。

どうやらスライムが家に帰るお供を
引き受けてくれたらしい。
よかった。オレは役目は果たした。
今度はオレを帰してくれ。

今晩はここに泊めていただけるとの
ことでお言葉に甘えることにした。
とても親切な方たちだ。手料理を振る舞ってくれた。

料理する時ぐらい鎧を脱げ、とかオレは言わない。
いろんな家庭があって、そこにはいろんな独自のルールがあるのだ。

昔のことを思い出す。
小学生の時，ゆうすけ君の家に遊びに行った僕らに
オヤツとしてカレーライスがでてきた。

あの時の満面笑顔でカレーライスを食べる
ゆうすけ君を忘れられない。
次の日から、ゆうすけ君は
軽くいじめられるようになってしまったのだ。
あってはならないことだ。

いいじゃないか。
家の中でも全身，鎧で過ごす家族なのだ。
この家は、天井が低いとか
この家は、出てくる牛乳が薄いとか
この家は、寝る時間が早いとか
オレは思っても口に出さない。問題じゃない。
真夜中に、全員が外に出ていく家族だろうが

オレは気味悪いとか人に言わないのだ。

いろんな家庭があって！！いろんな事情があって！！
そこには、家族の数だけ独自のルールがあるんだっ！！！

大事なことなので2回書いておく。
ーーー

悪い話ではないという。

スライムはそう言って、オレのカバンの中から見知らぬスカーフを取り出した。。。

次回へ続く

冒険の書7　同乗するなら金をやる

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人！！

お礼としてスライムを帰すべく
危険な村の外へ出る村人！！

目的のスライムの友達である
「さまようよろい」にも会えた！！

役目は終わった！もう村に帰る！！
ところが、スライムが意外なものを出してきた！！

――――――

最近知ったこと。
金持ちとは、どこかへお金を預けるそうだ。
そこで預金を引き出す鍵になるスカーフ。
換金したいという。
勇者のスカーフは、勇者の仲間どもに渡し
罪をかぶせた時に使ったはずだ。

スカーフは一枚じゃないと言う。
金持ちとは、一つの場所にすべてを預けないものだと。
いくつかの場所に預け、使い分けるらしい。

「勇者の仲間どもへ置いてきたものがメインで、この残りはサブだと思う」

と言っていくつかのスカーフを取り出した。
その換金のために、協力してくれる人間さえいればという。
街内にモンスターは入れない。

兄弟が死に旅費がなく、さらに困ることになるのが
今後の家族に生活費が必要なのだというスライム。
それは切実で深刻だ。

確かに死んだ人間からお金を奪うとは、とんでもないことだと。
だからもちろん、必要な分だけでいい
とスライムは言った。
略奪ではなく、これは最低限の損害賠償だからと。
どうか助けてほしいという。
きっと財産は莫大であるから
残りはサマヨウヨロイと分ければいいと言った。

オレもまた協力するしかないのか。
彼らと一緒でなければ、村へ帰れない。

スライムは被害者だ。
補償を受ける権利がある。
サマヨウヨロイは、見返りに期待しているらしい。
うんうん、うなずいている。
サマヨウヨロイが、スライム帰郷のお供をする件は
その約束もあって成り立っている、という話だ。
おいしいところで出てきたよな。こいつ。

死んだ勇者の金とは、いかほどあるのだろうか。
自慢するほどだ。少なくはないだろう。
勇者を殺し、罪を人にかぶせ、金まで奪うことになる事実。
オレとしては素直に喜べない。

しかし、やるしかないのか。スライムには金がいる。
オレも村へ帰れない。

とんでもないことになった。
とりあえず、今日から城下街へ向かっている。
それから、もっととんでもないことにもなっている。

夜の野宿は危険なため
サマヨウヨロイの中に入って、寝ることになった。
この汗臭い鎧の中で寝るのがいい、というスライム。

サマヨウヨロイよ。なぜ汗をかく。
中身のないオマエが、何を分泌するのか。

しかし、クサイとか絶対言ってはいけない。
オレの命を守ってくれるのだから。
命には代えられない。

剣道部の部室の夢をみること、間違いない。

――――――

天下をとったように笑っていたっけ。
魔法使いのじじぃもまた同じく。
期待は高まる。

今日もまた、くっさいサマヨウヨロイの中で寝るオレ。
くっさい、ほんとくっさい。
臭いが移ってきている。最悪。

でもそう。今日までさ。
なんてったって明日からは大金持ちなのだから。

明日はまずリセッシュ（消臭）を買ってやる。

――――――

名前のところに「スライムナイト」と書いていた。
※よって以下、スライムナイトとする。

オレとスライムナイトは城下街に入って
すぐに、お金を預ける場所を聞いて回った。

どうやらオレが臭いらしく、話を断られてしまった。
それを見たスライムナイト（サマヨウヨロイ）が
「ドンマイ」
と言ってくれた。
オレは後ろからスライムナイトを殴った。

どうやら預金とは
「どうぐや」というショップで受けられる
隠れサービスなのらしい。親切な人が教えてくれた。
どうりであまり知らないわけだ。

そして「どうぐや」というショップを探し、スカーフを出した。
「勇者様の関係者の方ですか？」
と聞かれ一瞬、オレは困ったが
「遺族です」
とスライムナイト（スライム）が機転を利かせて答え
なんとかその場をごまかした。

勇者が死んだことは、城下街の人々にも知れている。
スライムナイトと話し、長居はしないほうがいい
という結論になった。

そして、金額なのだが…

次回へつづく

冒険の書８　股間がキラリ☆

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人！！

お礼として、スライムを帰すべく
危険な村の外へ出る村人！！

なんと勇者の預金を引き出せるアイテム（勇者のスカーフ）を
持っていたスライム！！

いざ換金すべく街へ！！
勇者の預金は手にいれることはできるのか！！

――――――

つまり、あるところにあって、ないところにはない。
この世の金は、すべてここに集まっていたのだ。

１つのスカーフにつき1万～3万ゴールド。
全てのスカーフを換金。
合わせて２０万ゴールド近くになった。

思い出せばそれからだ。
笑いが止まっていないのは。
我慢しても、笑いがとまらない。

それからすぐホテルに行き、チェックインをした。
言うまでもなく
一泊２００ゴールドの最上階にあるスイートルームだ。
２００ゴールドでいいらしい。たった２００ゴールドだ。

とにかく笑った。
狂ったように。　笑ったんだ。

ワインを開けては笑い
ビールをかけあって臭い体を洗い、笑った。
サマヨウヨロイに金を詰めては笑った。

スライムは全身に金貨を張り付けて
メダルスライム
と言って跳ね回って笑った。

サマヨウヨロイは股から金貨をはみ出して
「はみ金」
という一発ギャグを連呼した。

とにかく、とにかく今日は人生最高の日だ。
最高の仲間。最高のギャグ。最高の夜。
すべてが最高だ。

ここから見える夜景のすべてに
買えないものがないのがオレは悲しい。
オレはただただ、それを悲しむばかりだ。

――――――

もちろんだが、何においても
最高峰、最高級、最高クラスでないと我々は納得はしない。

スライム卿は
図鑑やら辞典やらを買っていたようだね。
勉学に勤しむのは、我々の常である。
知識階級にとっては当たり前のことだ。

サマヨウ・ヨロイ男爵は
装飾品や武芸道具を買っていたようだ。
たしかに。武芸の訓練は欠かせない。
心身供に鍛えてなければ、真の貴族とはいえないだろう。

荷物が多くなってきたので使用人を雇うことにした。
カタログを見せてもらったが、なるほど、
職種もいろいろあって悩ましい。

戦士、武道家　などの肉体派は
ボディガードにすれば、まぁよく働くだろう。
魔法使い、僧侶などは、魔法などの手品をさせれば
いい余興になるかもしれない。
また、いっしょに楽しむならば
遊び人や商人の女の子、なんてのも悪くはないね。

だが我々は、ひとつ悲しい現実に目を背けずにはいられなかった。
チャンスは平等に与えなければならないのだが、許してほしい。

今日としては『盗賊』
という一番安い使用人に決めた。

盗賊だ。賊なのだ。
なぜ犯罪者が職種になっているのだ。
貧富ショック。涙が止まらない。
これは厚生させねばなるまい。

我々は慈悲深い。
金持ちとは社会に貢献する気持ちが人1倍強いのだ。
人生をあきらめていけないぞ、同い年の若者よ。
君は運がいい。
そういうわけで希望の倍の報酬を払い
更生し、今後は親孝行せよ　とやさしく言った。

盗賊は、涙を流して喜んでいた。
そうだ。感謝する気持ちから、慈善は始まるのだ。

今日は買い物をすませ、馬車に詰め込み、
そのまま馬車屋に預けておいた。

馬車？
６馬駆動システムの今年の秋モデル。無論、最新型だ。
パワフルな走り。豪華な室内空間。
スポーティ&リッチを実現した
まさに我らの凱旋にふさわしい足だ。
駐車料金だけで１日１００ゴールドなんて
どうでもいい話だったね。まったく。

明日からはもう来なくていいと盗賊には言っておいた。
そうでなければ明日また、別の誰かを救えないではないか　笑

今晩はこれから闘技場という

モンスターを戦わせて賭ける茶番に付き合うことになっている。
サマヨウ・ヨロイ男爵はギャンブルに目がないらしい。
どうにも困ったものだね。

楽しめればいいのだが。
まぁ、期待している。

――――――

もだめだ。。。。

も死にたい。。。

――――――

冒険の書９　都のマグロは一味ちがうぜ

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人！！

お礼としてスライムを帰すべく
危険な村の外へ！！

スライムのため勇者の預金を
手にいれるべく、いざ街へ！！

結果は大成功！！
大金を手に入れると思い上がりまくった村人！！

だが金が突然消えた！！

ーーー

…まさか持ち逃げ？
と思ったが部屋の外にサマヨウヨロイが倒れていた。
よくみると尻にスライムが刺さっている。
またいつもの悪ふざけか。仲のいいやつらだ。
バカヤロ。見つかる。早く部屋に戻れ
と言っても様子がおかしい。
超スローモーションで慌てている。
運悪く、その場にホテルの従業員が
来てしまい大騒ぎになってしまった。
ここで冗談じゃないことに気づく。手遅れだ。
あっという間にお城から警備兵が殺到し
彼らは連れて行かれた。
オレはすぐに荷物をまとめてホテルを飛び出した。
彼らはどうなってしまうのか。
そして金は何処へ？
金がなければここにはいれない。
警備兵の後を追った。
闘技場に向かっている。
脱走したモンスターとかと思われたのかな。
そして闘技場に引き渡されてしまった。
警備兵が帰ったのを確認して中の様子を伺っていると
「モンスターをみたいのか」
と飼育員風のオジサンが話しかけてきた。

この闘技場は国営であり，捕らえたモンスターは全て
ここに連れてこられるようだ。法律があるらしい。

オーナーを国王本人が務めており，
趣味にしては大変な力をいれてようで、保護法や捕獲法まで作り
集めているんだそうだ。

よかった。駆除とかの心配はなさそうだ。
モンスターコレクターとかそんなんちゃう？

話しではモンスターの売買もできるという。
いくらかかるのかと尋ねると

スライムは１０００Ｇ
サマヨウヨロイは５５００Ｇ

ぐらいということだ。超高額だ。
しかしサマヨウヨロイは高いな。

実はサマヨウヨロイは「旅する収納」と呼ばれ、
なかなかレアらしい。
たしかに便利だったアイツ。
今はとにかくなんとかするしかない。

オレは貼ってあったバイトの求人に目がいき
「仕事ができないかと思って」
と言った。

なんとかスライムたちに接触しなければ。

とにかく金もなければ今日の食い物にもありつけない。

仕事を紹介された。
闘技場のマグロショリとかマグロヒロイとか
呼ばれるお仕事らしい。よくわからん。

金はいい。さすが都。
ちょっと過酷だけど1日30G。
だが目標のスライム買取には、ほど遠い。
サマヨウヨロイなど気が遠い。

馬車が出せれば……
昨日買った資産だ。
全てを売ればかなりの金額になるだろう。

しかし駐車料金が払えず出せないのだ。
1日100ゴールド。狂ってやがる。

初仕事は力つきたモンスターの処分だった。
「くさったしたい」というモンスターの死体を埋めた。
なんだかややこしい。

先日みた限りでは闘技といってもショーに近く
危険はあまりないと思える。
なぜ死体が？
老衰のようには見えない。外傷がひどい。

数分だがオリにいるスライムに接触することができた。
ここでお別れかもしれないという。
弱気になっている。ムリもない。

金で外に出せるのだと伝えた。
全然届かない金額じゃないと言っておいた。
ウソだけど。

スライムは恩人だ。
サマヨウヨロイも悪い奴じゃない。

オレもここで逃げるほど卑怯者ではない。
近くはないがゴールが見えている話。
大丈夫。オレはやる子。
というか一人じゃ村に帰れないし。

そして金の件。
金は奪われたと言っていた。
なんと捕まっていたはずの魔法使いのジジイにだそうだ。
奴が来たという。

どうやったのか。
逃げ出してきたのだろう。
確かに魔法使いならば手錠やオリなどは
無意味だとスライムは言った。

あのスローモーション。
またボミオスな体にされてしまったと。
また１０日間はこの状態だ。
しゃべるのさえ遅い。

「この闘技場には悪い噂があって……」
最後によくわからないが、
スライムは言い終われずに戻されていった。

その日はそれ以上話す機会がなかった。
一日の仕事を終え、日当をもらい、闘技場を後にした。

その帰り道。
ぜんぜん思いもよらぬことが起きた。
なんと街でアンジェリーナちゃんのお父さんと会ったのだ。

アンジェリーナちゃんの記憶が戻っていないらしい。
あれからずっと。

オレの機転が招いた結果だ。
治療法を探しに来たらしい。
危険を冒してここまでくることから見ても良くないことが分かる。

どうしよう……
浮かれていたりもした自分に腹がたつ。

村に帰らねばならない。
あれだけあった金も奪われた。
仲間も捕まり
アンジェリーナちゃんも。。。

その日は絶望のまま木の下で寝た。

それが27日。先日の出来事。

それから今日までは先日の盗賊を探していた。

いい考えを思いついた。
盗賊ならピッキングとかできるはずだと。
カギを開けたい。馬車を出すのだ。
そう、それが一番早い。

派遣会社へも行ったが連絡が取れないらしい。
まだ雇用契約が残っているぞ。どこいきやがった。

この広い城下街でどうやって捜すか…
…と途方にくれていたら
さっき偶然、見つけた。

デート中だった。
商人（アパレル関係）風の女の子と歩いていた。

商人（アパレル関係）風の彼女がとにかく可愛い。
趣味が合う。
なんか、ああいう髪の感じとかいい。
ああいう服の感じとかもいいし
芸能人でいうと……

違う。
この非常時になに遊んでやがる、賊め。
その場で契約書を見せ「仕事だ」と言って
無理矢理に連れてきた。

「もう来なくていいゆーたじゃないすか」
とか言う。うるさい。
明日でもよかったんだけど

彼女が可愛いかったので今にした。

ピッキングをしてくれ。
全然できないという。

あてにしてたのに。。オワタ。

とりあえず明日またスライムのところへいく。
お金もない。
マグロのバイトへいくしかない。

次回へつづく。

冒険の書１０　変態仮面におまかせあれ

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人！！

お礼としてスライムを帰すべく村の外へ出る！！
そこへ勇者の預金を手にいれるチャンスが！！
村人たちはいざ街へ！！

結果は大成功！！
大金持ちになってすっかり有頂天！！

しかし、早くも金は奪われるは
仲間も捕まるは
真っ逆さまに落ちていく！！

――――――

あの盗賊も連れて来た。
一緒に働いてもらう。
すこしでもお金を集めないと。

マグロショリと聞いて盗賊は真っ青になっていた。
知っているらしい。普通はそんな仕事はやらんそうだ。
そーなの？

絶対やりたくないとダダをこねたが、契約外の金を受け取ったことを派遣会社に言いつけるぞと言うと盗賊はおとなしくなった。
お金の力ってすごい。

でもこの盗賊がオレ達を助けてくれるかもしれないのだ。

スライムには会って話した。
盗賊を連れてきたことにエラク喜んだ。

「レミラーマ」
という盗賊が使うアイテムの探索技術があるらしい。
方角ぐらいしかわからないものだが
探したい物と同じ物を持っている場合、より正確にわかるという。
なんでもそれを使えば魔法使いのジジイの居場所がつかめるかもという話だ。

どうやって？って話なんだけれども
スライムがサマヨウヨロイへ視線を送る。
サマヨウヨロイがゆっくりと股を広げる。
股間が光っている。なんと金貨だ。

これを換金できればいいのだが、価値はないらしい。

奪われた勇者の預金の中には「小さなメダル」という特別な金貨が含まれていたという。
サマヨウヨロイの金貨がそのひとつだった。
サマヨウヨロイが以前に見せた「はみ金」。そのまま、忘れていたらしい。

はみ金がここで活きた。
サマヨウヨロイの股間からほかほかの金貨をとり、盗賊に渡した。
盗賊は絶句した。
とりあえず、おれらは魔法使いのジジィを探すことに。

それからもうひとつ。ここの闘技場の話。
実はモンスターたちが暴動（テロ）を起こそうと機会を伺っているんだそうだ。

モンスターが死ぬ。
あくまでも闘技だ。事故はある。
しかし、ここにきてある噂が流れている。

表向きは闘技での事故死となってきたが
なんでも、ある武器の「試し斬り」に使われているというのだ。

この街、ロマリアには世界の大ヒット商品「はがねのつるぎ」が売られている。
この武器は昔から現在に至るまで多くのファンを魅了しており
「はがねのつるぎを買った時のワクワク感は異常ｗｗｗ」のＣＭでおなじみだ。

「はがねのつるぎ」の成功に潜む影。
モンスターを使っての「試し斬り」、つまり品質チェックが行われ

ているという。
最近になって発覚し、闘技場のモンスターたちが反乱を企てているらしい。

恐ろしい話を聞いてしまった。
オレが埋めている死体はそれなのかも。。。。
国王がオーナーともなっているところも何かくさい。

賛同しているモンスターはかなりの数がいる。
事が起きれば大きな騒動になるだろうという。
巻き込まれては危険だというのだ。

タイミングが悪い。
とにかく急ぐことに変わりはない。
魔法使いのジジィから金を取り戻し、スライム達を出す！
頼むぞ盗賊！

――――――

１発目には薬局のバイ〇グラに反応。
２発目には捨ててあったコン〇ームへ案内された。
３発目には〇〇〇が。。。書けたもんじゃない。バカがっ。

同じ物を持っていると、強く感知できる「レミラーマ」。
すべてコイツのバックの中にそれら同じものがあった。
何考えてんだコイツ。なんで常備してんだよ。

バックを預かって金貨（小さなメダル）を持たせて、レミラーマ４発目。
洋服ショップに着いた。ああ、そういうことか。

盗賊を全裸にさせて金貨（小さなメダル）だけ持たせてレミラーマ５発目。

バリバリ感知できたという。
しかし裸では案内できない。
しかしのしかし、服を着ると洋服ショップとの感覚と整理できない、とかいう盗賊。
修行不足感がハンパない。

ならばパンツ一枚だけはかせてみようと。
よし、これでいけ。
これでは変態だ　という盗賊。
とりあえず顔だけは隠させてほしいというのでタオルを買って覆面にしてやった。

パンツ一丁の覆面男の案内の元、街を歩き、郊外へでた。
話しかける盗賊にオレは他人のフリをしまくった。すまない、変態。
違う盗賊。

そして、街の中心地から離れた郊外。
ある小屋にたどりついた。
ここに魔法使いのジジィがいる！！

次回につづく

冒険の書１１　氷結！三河屋サブちゃん

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人！！

スライムを帰すべく村の外へ出ると
勇者の預金を手にいれるチャンスが！！
村人たちは街へ行き、大金を手に入れ有頂天に！！

しかし、早くも金は魔法使いのジジイに奪われ
スライムたちも捕まってしまい大ピンチ！！

だが、盗賊の登場により希望が見え始める！！
そして魔法使いの居場所を突き止めた！！！

——
——
冒険の書１１　氷結！三河屋サブちゃん
——
——

１０月３１日　　—　続き

小屋に近づく。

窓から見てみる。
チラっとカーテンの隙間から人が見えた。

あの魔法使いのジジイだ。

なんだか様子が変だった。
金を抱えて、取り憑かれたようにあたりに警戒している。
特に目がヤバイ。焦点があっていない。
そして金を集めては数えている。

しばらく見ていたがずっとそんな感じなのだ。
正気じゃない。幸せな金持ちにはとても見えない。
あまりの大金に狂ってしまったようだ。

そういえば忘れていた。
見つけたところでどうするかということ。

相手が相手なのだ。元勇者の仲間の魔法使い。
力はそうでもないが、強力な魔法を使うのだろう。
あのスライム達でさえ、あのザマだったんだから。

でもこの状態なら一挙に……いや無理だ。
あれは警戒心の固まり。どんな無茶するか分からない。
接触したら最期、殺されるかもしれない。
もうね、そんな雰囲気なのだ。

どうしよう。。。

盗賊にはほんとに危険な奴だからと、ちゃんと言ったんだ。
もう帰っていいとも言った。
契約はちょうど1週間。明日で切れるし。

「バカにしないでください！最後までやれます！」

「プロとして恥ずかしいことはしたことはない！！」
といって聞かない。
パンツ一枚姿の裸体でよく言うよ。

オレと盗賊は交代でピンポン作戦を決行した。
ピンポン作戦とはチャイムを鳴らし、様子を伺う作戦。
いわば偵察だ。

「こんにちわー。宅急便ですけれどもー」
「ちわー。福祉センターの者ですけれどもー」

ぜんぜん出てこない。
盗賊は福祉ネタか。
近年、高齢化が進み、介護を必要としているお年寄りは多い。なかなかやりおる。

「こんにちわー。ピザハットでぇっす」
「ちわー。消防署の方から来ましたー」

反応なし。だめだ。
しかしやるな盗賊。
消火器も持たずにそれやるか。度胸がある。
ならばオレのターン。

「こんちわーオレオレー。オレだよーオレオレー」
「ちわー。三河屋ですぅーイソノさーん」

サザエさんのサブちゃん！？
と思った盗賊のターンだった。

ドアの下の隙間から杖の先端が飛び出した。
同時に、カッと光ったと思った一瞬。
凄まじい寒気が通り抜けた。

そして。
カッチカチに凍ったパンツ一枚の盗賊が転がってきた。
だから言ったのに。ふざけてるからだ。

実力は分かった。絶対かなわない。知ってたけど。
盗賊の死は無駄にはしない。
扉さえ突破することができないのか。

とにかく金の近くから動かない。くそ。
金から離れなければ取り返す術はない。
スライムに相談してみようと思う。
何かいい案があるかも知れない。

盗賊は林に隠しておいた。
後で溶かせばなんとかなるだろう。
余計な仕事増やしやがって！

――――――

ておいた。
強い仲間とかいい武器や道具でもあればいいけどお金もない。

スライムは笑った。
それであれば簡単かも知れないという。
マジで？

それも合わせて急いでほしいという。
闘技場内のモンスターたちが騒がしい。
明日の夜、「キング・ナイト」というオーナーが来る特別な夜なのだそうだ。
つまり王様が来るわけだな。

過激派のモンスターたちが明日に向けてテロの準備をしているらしい。
魔法使いの呪いが解けず、この体では逃げることもままならないという。

急がなければ。
スライムから秘策を聞いた。やってみることにする。
すぐに戻ってくると約束し、その日のバイトは終わった。
決行あるのみだ。でもうまくいくかな。

――――――

格好はしたくない。
商人と言えばセールスマン。セールスマンといえばスーツだ。
でもスーツって着た事がない。どれがいいのか、よくわからない。
接客業なんだから清潔感があるほうがいいはず　ー
ということで白いスーツを買うことにした。
新品のスーツでびしっと決めると気が引き締まる。

接客業に身だしなみは重要だ。床屋へいく。
店員は熱したコテで髪をクルクル巻きだした。なにこれ？
仕上がりとしては髪が小さく渦巻いている。
『あいぱー』と呼ばれるスタイルらしい。都ではこういうのが流行ってるのかな。

「お代は結構です」
と言ってくれたので得した。
どうして怯えていたのか分からないけど、まぁいいか。

【作戦　その2】　カタログをもらえ

百貨店へ行き、あるカタログを目一杯もらってきた。
「購入を考えてまして」
というと無料でたくさんのカタログをもらうことができた。

これからコレを使ってセールスをするのだ。
しっかり見ておこう。商品知識を積まなければならない。
知識のない物売りなどお客様に失礼だ。
信用は得られるセールスマンに、オレはなりたい。

【作戦　その3】　訪問販売へ

魔法使いのジジイの小屋へいく。
チャイムを鳴らした。

「すみません。金庫を売っている者ですが少しお話を聞いてもらえないでしょうか。」

小屋のドアがゆっくりと開いていった。

次回へつづく

冒険の書１２　笑うセールスマソ

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人！！

スライムを帰すべく村の外へ出ると
勇者の預金を手にいれるチャンスが！！
街へ行き、大金を手に入れ有頂天に！！

しかし、早くも金は魔法使いのジジイに奪われ
スライムたちも捕まってしまった！！

なんとか盗賊のレミラーマで金の在りかを突き止めた村人！
金は取り戻せるのか！！

――――――

「キンコ？」

■魔法使いのジジイが現れた。
■魔法使いのジジイは興味深そうな顔でこちらを見ている。

ドアを閉める
セールストーク
↓　スライムの作戦をおさらい

勇者の預金を手に入れた後、考えなければならないことがある。
金をどう守るかだ、というスライム。

この大金の厄介さは、また道具屋に預けることができないということ。
勇者が死んで幾日も経っていない。
そこで、すぐさま下された巨額の勇者の預金。。。。
不審に思うのが普通だ。
事件捜査部もバカじゃない。今頃、金を追ってることだろう。
今、大金もって外をウロつくことが危険なことぐらい気づく。
だから、オレらもすぐに脱出しようとしてたんだよね。

自分で見張るしかない金。
どっかに置いておくなんて無防備すぎる問・題・外！
だから目は離せない。仲間がいないジジイは動けないのだろうと。
生活には苦労するし、神経もおかしくなる。
信用できる安全な隠し場所があれば……

そこを金庫で釣る。
オレらでいうサマヨウヨロイだ。

この金には安全な入れ物が不可欠なのだ。
それがスライムの読みと策だった。

【作戦　その４】　金庫を売る

「どれ。見せてくれ」

■魔法使いは、もう金庫みたいな顔でこちらを見ている。

　　ドアを閉める
↓　セールストーク
　　スライムの作戦をおさらい

オレは寝ずに考えたセールストークを展開した。

□最近、この辺で犯罪が多いようです。
□ピンポン詐欺なんかもよくあるようで。
□チャイムを鳴らして玄関に出ている間に空き巣に入る。
□物騒な世の中ですよね。
□そこでどうでしょう。大切な資産、守ってみませんか？

魔法使いのジジイは思い当たる節があるようだ。
盗賊よ、見ているか。お前の死は無駄にはしない。

「これをくれ」

もらってきたカタログの中から一番デカイ金庫をお買い上げになった。
金は金袋に分けられており、十数袋。
オレらがサマヨウヨロイの中に満杯に入れて、管理していたことが

思い出される。
そんな体積の金庫であるから、人が入れるぐらいデカイ金庫でないとだめなのだ。

それから百貨店へ行き金庫を注文。ロックの仕方など説明を受けた。
物置のようなデカイ金庫をジジイの家まで運ばせ、設置した。
代金をジジィからもらい、業者に渡すと帰っていった。

さっそく金庫へ金袋を入れて始めているジジイ。
後でロックの説明をするといってオレはまだ室内にいる。

大金は金袋にしてかなりの数になる。
喜悦して作業しているところを、お手伝いしましょうか？と話しかけると
「触るな」
と鬼のごとく怒られてしまった。
警戒は解いてはいない。

「先に金額をしっかり数えておいたほうがいいですよ。
金庫の中にいくらあるか、しっかり把握できるようにです。」
と、オレは言った。

【作戦　その5】　しっかりロックする

「おお、そうだ」

苦しみから解放されたように顔はほころんでいるジジィ。
夢中で金庫の中で金を数え始めていた。

■魔法使いのジジイは金庫の中で喜んでいる。

↓　ドアを閉める
　　セールストーク
　　スライムの作戦をおさらい

オレは優しく金庫の扉を閉めて、そっとロックした。。。

いつまでも金庫から聞こえる金を数える声をオレは忘れない。
これほど人の注意力を削ぎ、心を奪うお金とは一体なんだろう。
お金とは我々の計り知れない魔力を持っているのかも知れない。
ならばあえて問いたいのだ。
お金なんていらないのでは？
今回の争いもそう。世界で苦しんでいる戦争も飢饉も皆、そう。
お金があれば人より裕福に、より力を、より上へ。だからもっと、もっと。
そんな魔力にかられた欲望が悲しい現実を生み出しているのでないでしょうか。
まさに不幸の源。言わば呪われたアイテム。
そんな魔力のあるものなど、身のそばにないほうが幸せなことなのかも知れません。

太古の世界へ戻ろう。貨幣もなく、狩りをしていた時代に。
野を駆け、山をめぐり、超動物的な生活をしていた頃に。
人類の本来の姿とはその程度なのだとオレは信じます。
我々は身のほどを知らずに、思い上がってしまった生命体なのかもしれません。。。

そんなことを考えながら金庫の外にある残りの金を漏れなく回収し、

俺は小屋を後にした。
この金は誰にもわたさない。

次回へつづく

冒険の書１３　夢みるカニじゃいられない

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人！！

スライムを帰すべく村の外へ出ると
勇者の預金を手にいれるチャンスが！！
街へ行き、大金を手に入れ有頂天に！！

しかし、早くも金は魔法使いのジジイに奪われ
スライムたちも捕まってしまった！！

なんとか魔法使いのジジイの油断をつき、金を取り戻す村人！！

――――――

取り戻すのが全部じゃなくて、全然いいのだ。
それでも5，6万ゴールドはあると思われる。
必要な分には充分足りている。

それから馬車を出した。
高額な駐車料金が払えず、放置していた馬車。
高いと苦情を言うと馬の管理にはお金がかかるのだ、
と逆に怒られてしまった。
馬車を持つとはそういうことらしい。
しかもウチのは最新式の6馬駆動システム。6匹いるのだ。

大金を持ち、調子に乗っていた。
これからの維持費を考えるとあまり経済的ではないのかも知れない
とか、
主婦のごとく今のオレには計算できる。
持ち金をすべて失い、日払い労働かつ野宿という
マンガ喫茶難民を凌ぐ生活はオレを変えた。
成長したのだ。

これはみんなの大切なお金。
大事に意味ある使い方をしなければいけない。

そしてスライムたちの買取り（救出）に闘技場へ向かった。
もうすっかり夜になってしまっていた。
闘技場の明かりが遠くからでもよく見える。

オレは道を急いだ。
この日の夜は「キング・ナイト」と呼ばれ、王が来る特別な夜という。

それを狙い、闘技場ではテロが起きる可能性があると聞いていた。
彼らスライム&サマヨウヨロイは
魔法使いのジジイから金を奪われた時に呪いをかけられ、体の自由が利かない。
テロというのが、どんなものなのか分からない。
だが何かあってからでは遅い。その前に助け出すがベストだ。

「モンスターの買取は午前中だけだよ」

とかいう、悲しい現実はいつのときにもオレを襲う。
これだもん。。。。
友を助けたいという気持ちが貴様に分からんのかハゲ！
という強い思いを何かにぶつけたい。
そういうストレスみたいなものがここで生まれた。

しかし、闘技上内に入ることはできると考えた。
「キング・ナイト」への参加者として入場するのだ。
キレイなおねえさん達が、どんどん闘技場に吸い込まれていくのを見たからでは決してない。本当だ。
テロに備えて中で待機すべきだ。
有事の際にはオレしか助けにいくことができないからね。
不純な動機はない。

中に入れば、ただ見てるというのもなんだか不自然だ。
やはり、それなりに自然な？大人の振る舞いとして？
ギャンブルに参加すべきだと思ったんだよね。うん。それが大人のマナー。

まぁそこでちょっとね。
１万ゴールドほど負けてしまって。

でも大丈夫。ほら、あの馬車があったじゃない。
あの経済的にきつい馬車。６匹だと多いじゃない？
だから５匹売って１万ゴールドにしたんだ。
それで埋めといたから大丈夫。

しかし、闘技場は近くには質屋はあるわ、金貸しはあるわ、なんということだ。
換金　↓　ギャンブル　↓　借金　↓　ギャンブル　↓　・・
という地獄循環にハマって金に焼かれて死ねというのだな。
面白いじゃない。これは挑発だ。

ここで引いたらスライム達にだって笑われてしまう。
男ならここでアツク勝負だ。
闘技場からの挑発。
友を助けたいという強い気持ちを、オジサンにふいにされたストレス。
美女の前で派手に勝って目立ちたいという見栄だった、とかではないんだ。
熱い気持ちと、やるせなさ的なものがオレを勝負（ギャンブル）へ駆り立てたんだ。
オレは悪くない。
オレは自分で何を書いているのかわからない。

そういうわけで、過程は省くが、もうすでに残金は１０００ゴールドになっていた。
これではスライム達が救えない。。くそう。
ここで俺が頑張らねば！
俺がやらずに誰がやる！

勝負に出た。

１３倍の「ぐんたいガニ」の１点買いだ。
絶対に負けられない戦いがここにあった。
見事に熱い勝負の末に、ぐんたいガニは勝利した。
オレは勝ったのだ。
オレは１万３千ゴールドもの金を手にいれたのだ！！
やったぜ！！今夜はカニを食おう！！
とかそういうわけで、過程は省くが、結局のところ、５万ゴールド近くを失ってしまったことは
きっと夢に違いない。

そんな悲しい現実より、楽しいショーでも見ようよと。
先ほどの「ぐんたいガニ」が何か手まねきをしていた。
ステージ上に仲間を呼んでいる。わさわさとぐんたいガニが現れ集まってくる。
ショータイムは始まった。
たくさんのカニ。わぁ美味しそう。ちがう。わぁすごい。

ぐんたいガニの上に乗るぐんたいガニ。
あっという間に高い「ぐんたいガニタワー」が出来上がった。
なぜか一番頂点に岩が乗っていた。

なぜ岩？と思った瞬間。
岩が飛び降りた。

回転しながら落ちてくるその岩から、顔がついている面が見えた。

トラウマになるようなひどい光景だった。
その顔は不気味な微笑みのまま落下し、
着地と同時に大爆発を起こし、バラバラになった。

ショータイムは始まった。（テロ的な意味で）

次回へつづく

冒険の書１４　盗んだ台車で走り出す

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人！！

スライムを帰すべく村の外へ出ると
ひょんなことから勇者の預金を手にいれ、有頂天に！！

しかし、金は魔法使いのジジイに奪われ
スライムたちも捕まってしまった！！

なんとか金は取り戻し、スライムを助け出すため闘技場へ行くが、
モンスターたちに不穏な動きが！！

ーーー

オレは近くのテーブルの下に隠れた。
辺りはパニックと化していた。
人々が逃げ惑う中で
オレは床に落ちている金を拾うのを忘れない。
貧乏人なめたらあかんぜよ。

爆風で巻き上がるチリやらホコリやらしか見えない。
天井が崩れてきている箇所もあるようだった。
「出口はどこだ」とか
「外へ！」とか聞こえる。
叫び声と塵ホコリのなかで場は混乱を極めていった。

オレは逃げるわけにはいかない。
スライムとサマヨウヨロイを助けなければ。
事故とはいえ、みんなの金の９０パーセントを失っておきながら
ここで逃げたらほんとにクズだ。
金の件は、本当に不幸な事故だった。

初発の爆弾が、フロアに大きな穴を開けていた。
そこからモンスター達がワサワサ這い出してきている。

「王だ。王を捜せ」

指揮を取っているモンスターがいた。
どうやら客に危害を加えるようには指示していない様子。
フロアに開いた穴がモンスターのオリに
繋がっているのは間違いない。オレはここのバイトだ。
だいたいの位置関係は頭に入っている。
つまり、そこから入れば、スライムたちは近いはずだと。

しかしなんてこった。
爆風が金を撒き散らしていた。
それをこの状況で何を狂ったか
金を集めるのに夢中のバカがいるではないか。貧乏人どもが！
こんなときに金を拾うとか、ほんとに信じられない。

そんな逃げ遅れた者がモンスター達の餌食となっていた。
一度血をみたモンスター達は止まらない。
思い出したかのように野性を取り戻していった。

フロアの穴に近づけなくなってしまったのだ。
野性に返り、狂暴化したぐんたいガニがウロついている。
夕飯はカニのはずだったのに
カニの夕飯になってしまうわけにはいかない。

すると、どこからか大きな何かが飛んできて
凶暴なぐんたいガニの頭に入った。
ドデカイ斧だ。
ぐんたいガニの頭は陥没し、カチ割れている。
ウホッ、カニ味噌が！と普通の人なら狂喜するところだ。
カニ味噌とはカニのうまみを凝縮し、
最大に高めたカニからのイヤ神からの贈り物であることは周知の事実であって、
そのカニ味噌はダイレクトに口へ運ぶことにより神味に…
ではなく、注目すべきはこの斧だ。
指揮していた奴がブン投げた斧だったということ。

「目を覚ませ」

と言い、それをみた他のモンスターたちは我を取り戻したようだっ

た。
そして、統制を取り戻し、別のフロアへ行ってしまった。
指揮官は2メートルぐらいの大男であり、筋肉は隆々。まさにモンスター。
それに合わせて覆面にマント&パンツ一枚とは一体なぜだ。
レスラーだってお外ではそんな格好はしない。
変態の格闘家とか
変態キコリとか
変態野球のピッチャーとか別の可能性もある。

そんなガチムチ変態リーダーに謎は尽きないが
オレはフロアの穴から下りてスライム達を目指した。
彼らはオリの外の廊下にいた。無事だった。

スライムとサマヨウヨロイは
ボミオスという呪いがまだ解けておらず、体が不自由だ。
この非常時でもスローモーションで慌てている。
シュールな光景に目がないオレは
しばらく見ていたことは言うまでもない。

オレはバイトで使っていた死体運びの台車を持ってきた。

「助けにきたぞ」

と言ったときのやつらの顔ときたら。かわいいやつらだ。
とにかく二人を台車に乗せ、外を目指した。

ここままやり過ごし、落ち着いてから
彼らを買い取る形でここから出ることもできるだろう。

だが、この混乱に乗じて逃げちまおうと思った。
それがノーコストでベスト。タダよりイイものはない。
タイムいずマネー。先を急いだ。

従業員専用通路を使う。
外へ出る道は知っている。バイトですから。
しっかし、さっきの爆発による落盤が激しく道が悪い。
台車はそれなりに平らな道じゃなければ走れないのだ。それなりにまずい。

スライムはなんとか持てるかもしれないが
サマヨウヨロイは不可能だ。
なにせ金属の甲冑(かっちゅう)だ。重すぎる。

道が荒れ過ぎていたらアウツっとか思ってたらそんな心配は無用だった。
落盤のせいで通路がふさがっていたのだから。オワタ。
他の道を探し出すしかない。
そこから引き返して走り回っていると何かが飛び出してきた。

「み、見逃してくださぁい」

王だった。この城下町の主、ロマリア王。
本日の「キング・ナイト」のメインゲスト。どっかにいたらしい。
一番エライ人なんだろうが
あとあと書くことになるけどコイツは許せない。人間クズ。
小さい中年のおっさんが泣いていた。この時点でありえないな。
先の爆発で下に落ちたらしい。
モンスターたちが探しているぜ。

「助けてくださぁいぃ」

情けない声ばっかり出すんだ。
ロイヤリティのかけらもない。
サマヨウヨロイの中に隠れさせてくれ、としつこい。
確かにあの雰囲気からするとモンスターに見つかったら
夕飯にされていただろな。
仕方なくサマヨウヨロイの中に入れて出口を探した。

「そこで何をしている」

後ろから声がした。
さっきのガチムチ変態リーダーに見つかった。
回りまわって遭遇してしまったのだ。

オレは何も言わずに準備に取り掛かった。
もちろん、サマヨウヨロイの中の王を差し出す準備に決まっている。

次回へつづく。

冒険の書１５　武士の花火を守りたい

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人！！

スライムを帰すべく村の外へ出ると
ひょんなことから勇者の預金を手にいれ、有頂天に！！

しかし、金は魔法使いのジジイに奪われ
スライムたちも捕まってしまった！！

金は取り戻し、スライムのいる闘技場へ行くが、
爆破テロが起きた！！
この危険に紛れて救出を図るが！！

――――――

嫌ぁっていう中年のオッサンを初めてみた。

「何をしていると聞いている」

一番危険なのに出会ってしまった。
ぐんたいガニを一撃で葬ったリーダー格のモンスター。
ガタイの良さと覆面に裸、といったその風貌から
「ガチムチ変態リーダー」と記されてきた彼である。

彼の力動感あふれるフォームとその豪腕は、
遠く離れたぐんたいガニをも破壊する威力と精度のある伸びのあるオノを放つ。
制球力と球威を備えた、松坂大輔を思わせるまさに怪物（モンスター）であり、
変化球はまだ見ていないが、超一級品のストレートを持つというだけで、
ぜひ中日ドラゴンズに入ってほしい、とかいう件は、まったく関係ない別の話だ。

「はやく逃げなさいって。何してるんですかぁ！」

サマヨウヨロイの中から小さい声がする。国王だ。
バカヤロ。斧投げるんだよアイツ。
と返すと

「私はヨロイの中にいるから平気ですよ」

意味がわからん。バカかこいつは。
この時差し出してしまえばよかったと悔やまれる。
スライムが口を開いた。知り合いならすぐに反応してほしい。

自分の仲間で助けにきたものだ、と説明した。
変態リーダーもスライムとサマヨウヨロイが、まともに動けないの知っていた。
彼らがいないのを見て探しにきたという。

「同志じゃないか」

両手を広げて敵意を無くしたことを示してくれた。
裸で両手を広げられると、なんとも変態のソレのようにしか見えず、顔がにやけそうになるのを我慢した。
リーダー、早く後ろを向いて欲しいですと祈った。
とりあえず、安心した。出口もあるという。
案内されてついていくことにした。

「まだ王がみつかりません」

部下のような者々が集まってきて言った。
出口へ向いながら今騒動を説明してくれた。

彼らの目的は王を捕まえ、モンスターを逃がすことにあると。
また、国家が闘技場を持つ意味を教えてくれた。
モンスターを武器の試し切りに使うという、非道が行われるということ。
そして闘技場を持つ国は武器生産が発展し、戦争を支援し、潤っていく。
国の成り立ちに至るまで説明してくれた。
社会の物事とは表面だけでは測れない。

何者だろう？スパイなのかな。
「神田太一」という普通の人間だ、と言う。

そんなわけない。ウソは下手なようだ。
集まってくる仲間からは「リーダー」とか「アニキ」とか
親しくは「カンダタ」とか「ダタイチ」とか呼ばれ人気がある。
人望があるリーダーだ。
「変態リーダー」とは失礼すぎる気がしてきたので「神田さん」に
変更する。

王はもう仕方ないから闘技場を爆破し、脱出するという神田さん。

「他の者も皆、入口に集まっております」

1人の部下が言っていた。
中央出口から一斉に突撃して脱走するらしい。
モンスター群の津波と化して外まで突っ走るという。豪快だ。
そのドサクサに紛れて、オレらも外へ出ようと決めた。

向かう途中に調理室があった。
ガスの栓を開けていく。
ここでガス爆発を起こして、これでオシマイだと言った。

「ばくだん岩」さんのお話をしなければならない。
起爆剤になってくれた「ばくだん岩」さん。
今思えば、他の爆破はすべて「ばくだん岩」さんのお仲間のお命の
輝きだったのだろう。

「ばくだん岩」さん達に寿命はないそうだ。
彼らの一族とは「爆死」という過激なる最期により、その生涯を終
えるらしい。
その爆破の機会は自らに任されており、
価値あることに破裂するならば、第一の名誉とする一族という。

代々皆そうしてきたのだ、とあっさり言う「ばくだん岩」さん。
我々に自らの命を使うことを価値ありとして
名誉のため、一族の誇りを全うしようとしていた。
なんて気高く、誇り高い一族だろう。
よく見れば、雄雄しい武士（もののふ）の顔だ。
「ばくだん岩」さんにみんな心を打たれて、
悲しくも勇ましく思い、この人生最大のイベントを見守っていた。

「見事な最期でありました」

爆発前に先に言っておくのが礼儀らしい。
みんなでさよならの挨拶をしていた時だった。

「ばくだん岩」さんを蹴っ飛ばしたやつがいた。
国王だ。サマヨウヨロイのヨロイがずれている。
中からでてきやがったのだ。

コロコロ転がっていく「ばくだん岩」さん。
なんとか止めようと皆で追いかけた。
破裂の危険も顧みずに。皆、心はひとつだったんだと思う。
王はその間にどこかに逃げたんだろうな。
ふざけやがって。

そのまま壁に当たって。
大爆発を起こしたんだ。。

次回へつづく

冒険の書１６　ティーバック高校ラグビー部

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人！！

スライムを帰すべく村の外へ出ると
ひょんなことから勇者の預金を手にいれ、有頂天に！！

しかし、金は魔法使いに奪われ、スライムたちも捕まってしまった
！！

なんとか金は取り戻し、スライムのいる闘技場へ行くが、爆破テロ
が！！
この危険に紛れて救出を図るが問題がてんこ盛り！！

ーーー

前に神田さんがいたので、神田さんの大きな背中しか見えなかった。
見たくないものは見た。
神田さんのマントが爆風で吹き上がり、パンツがT字型のお尻が見えた。

残念でならない。パンツ1枚姿の神田さん。
前からしか見てなかったため、この時までわからなかったことだが
パンツがティーバックタイプだったのだ。
この人が「変態」で間違いないことが悲しい。
とても素晴らしい人なのに。

爆発の瞬間、あっという間にスライムもサマヨウヨロイも抱きかかえて
オレの上に覆いかぶさってくれたのだった。
ひ弱なオレなど間違いなく、死んでいただろう。

「皆は無事か？」

神田さんの声と同時に、
崩れたガレキの下からこの部屋にいたモンスターたちが出てきた。
これだけの爆発でもピンピンしている。まさにモンスター。タフだ。

「今の男は国王だろう？」

神田さんの部下である1人のモンスターに刃物を突き付けられた。
激怒している。
オレが隠していた国王が「ばくだん岩」さんを蹴り飛ばした。
彼らが国王を探していたことは、今までの会話から察しがつける状況だ。
その上で隠していたこと、そして、仲間として「ばくだん岩」さん

の命を賭けた爆発が
あんな不本意な形で終わらせてしまったこと。
その責任はオレに向けられた。これは死ねる。

「まてまて」

神田さんが言った。
神田さんは「ばくだん岩」さんが爆破したところで、手を合わせていた。
モンスターではない彼(オレ)が、スライム達を助けようとここまで来てかつ、同胞である国王を守ろうとしたことにどんな落ち度があるのか　と。
何の仇でもない同胞を助けることなど当たり前のことだ　と言ってなだめてくれた。

人望があるのがうなずける。アニキと呼びたいと思わせる人だ。
それも一瞬で考えてオレを守ってくれた、神田さん。
パンツがティーバック型なのが悔やしい。

ここで困ったことに爆発箇所が悪く出口が崩れてしまい、出れなくなってしまった。
完全に生き埋め状態に。しかし、奇跡は意外と早めに起きた。

「オーナー。いたら返事をしてください」

オーナー。オーナーとは雇用主。
派遣会社から雇っていた盗賊はオレをこう呼ぶ。
先日、悪ふざけにより魔法使いのジジイに氷付けにされた盗賊だ。
そこら辺に放置じゃなくて隠しておいた、盗賊がついに解凍されてやってきたのだ。

小さなメダル探索に利用した「レミラーマ」。
また同じ手で小さなメダルを持つオレを探し当てたのだった。

「ここから外にでれます」

ぐっじょぶ。ここぞいうときに。盗賊はすっかり男を上げた。
まったく、大勢をピンチから救い出したのだから。
オレの仲間なんですと、この危機を共にした神田さんやモンスターたちと
歓喜しながら抜け道から脱出した。

「なんだ、この変態は！」

神田さんは吼えた。盗賊はパンツ一枚に覆面だったからだ。
「レミラーマ」でのお約束。
余計な情報と整理するために、極力ものは身に着けない&もたない。
それがこのパンツ一枚姿。恥ずかしいので顔だけは隠す、という恥じらい探索スタイル。
でも、あれれ。神田さんだってパンツ（T型）一枚の覆面にマントがあるだけなんだぜ。
変態が一人増えた。

闘技場からの脱出行動に移った。
闘技場中央入り口に数十のモンスターたちが集まっていた。
ここから一斉突撃する。強行突破により外までの走ることになっていた。
外には早くも軍隊が構えている。みるみる増えていくようだった。
ヤバイ。

「　仲間を助けながら最後まで走ろう。　みんなで帰るんだ　」

モンスターたちは円陣を組んだ。オレも円に入らされた。
神田さんが話し始めている。みんなは意気を高めながら、静かに聴いているときだった。

「オーナー、印をください」

空気を読めないにもほどがある。
派遣雇用終了の確認印だ。こいつはこれをもらいに来たのだった。
盗賊とはここでお別れした。契約はもう切れている。
それなのにここまで来てくれたことはありがたいが、このＫＹぶりは何なんだ。
こんな時にまさか書類にサインすると思わなかった。
せっかくここまでイイ仕事してきたのに、台無しだ。

「じゃぁボクはここで」

闘技場内で逃げ遅れた客としてやり過ごすという。
巻き込んで悪かったな。かわいい彼女とうまくやれ。
それから、そんなカッコでいたら逃げ遅れた変態として
それなりに職務質問は避けられないだろうが、
それもコイツにはいいクスリになるだろうから言わないでおいた。
クスリが必要な人はもう一人いるが、神田さんとは言えない。

円陣は解かれ、号令が下された。
モンスターたちが怒涛の津波となって押し寄せた。

そこに空から１人の少女が降りてきて
「姫姉様！」
「姫様が！あんな所に！ムチャだ！」

「おおー！」
「姫姉様　死んじゃった」
「身をもってモンスターの怒りを静めてくだされたのじゃ。あの子は谷を守ったのじゃ」

なことがあったら、姫姉様は粉々になって復活は無理です、みたいな結末になるぐらい
みんなの勢いは凄まじく、軍隊は紙キレのように吹き飛ばされていった。
オレは台車にスライムとサマヨウヨロイを乗せて走った。

馬車に向かった。
すぐさまスライムたちを荷台に乗せ、馬車を出した。
「馬６匹じゃなかったっけ？」とかスライムたちが言っていたが５匹は死んだと言っておいた。

外への門に向けて走った。モンスターたちの集団にも追いついた。
しかし、門が閉まっている。夜は門が閉まっているのだ。

次回へつづく

冒険の書１７　シカゴの神とヒルズ族

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人！！

スライムを帰すべく村の外へ出ると
ひょんなことから勇者の預金を手にいれ、有頂天に！！

しかし、金は魔法使いに奪われ、スライムたちも捕まってしまった
！！

なんとか金は取り戻し、スライムのいる闘技場へ行くが、爆破テロ
が！！
巻き込まれつつも救出には成功し、そのままテロリストと外を目指
す！！

ーーー

言い放つ城下街を守る黒き門。
見るからに重そうな鉄鋼の門は、
黒よりも黒いその色をそのままに、静かにこちらを睨んでいた。

黒い鉄門には夜が似合う。
黒鉄をさらに深く、さらに濃く際立たせる。
夜が演出するその美観は
門の持つ絶対的存在感をさらなる次元に昇華させる。
門はマイケル・ジョーダン。
夜はスコッティ・ピッペンといったところか。
黒いという意味ではない。

そんな黒き王達に立ち向かうなど、思い上がりも甚だしいと。
重く厚い質感は
どこを見ても我々を絶望させるに充分な守備力を誇示していた。

「小さな亀裂が突破口になる」

振りかぶる神田さん。そしてまたオノは飛んだ。
手から離れたオノは、唸りを上げて加速していった。
神田さん対黒い鉄門。ガチンコパワー対決。

斧が鉄門に立ったのが見えた。突き刺さったのだ。
そこをぐんたいガニがものすごいスピードで突撃していく。
「ヒビさえ入れば、もろい」
神田さんは不敵に言った。

ぐんたいガニは上手にハサミを使って施錠を外して、門を開け出て行った。

内側。閉める側だもん、カギはあけられます。
近くで見れば一目瞭然。カニでも分かる。
誰かが「カンダタの痛恨の一撃」と言って笑っていた。

長い一日は終わった。今日の出来事はこれでおしまい。
皆で無事を喜び、すこし離れた茂みで寝ることにした。
野外はモンスターの本領。ホームだ。
軍隊も追うような無茶はしないだろうと。
もし襲ってきたらオレが驚かしてやると言って
マントを開いてパンツ姿を見せつけ、おどけていた神田さん。

変態にも夜は似合った。
夜の怪しい暗闇は、露出狂の異常性を何倍にもして
「絶対に変態だ」という認識をより確かなものにする。
そう、変態がマイケル・ジョーダンなら
夜はもちろん、スコッティ・ピッペンだ。

――――――

街内は昨日の騒ぎで持ちきりだった。
買い物をすませ、すぐに街を離れた。もう面倒はごめんだ。
それから仲間の元へ戻り、食事をすませ、お別れをした。
それぞれのモンスターは、それぞれの里に帰るという。
おさらば。みんなお元気で。

オレも早く村に帰らなければならない。
アンジェリーナちゃんの記憶が戻っていないという。
スライムもサマヨウヨロイもまだ満足に動けない。
かけられたボミオスが解けるのは、もう少しかかる。
なので神田さんが村まで付き添ってくれることになった。

神田さんはこれから「本部」という所に
報告へ行くのに通り道だからという理由もあって
村まで送ってくれたのだった。
ただ、書類とスーツを取りに一度家に寄りたい、とのことで家へ寄った。
「シャンパーニの塔」という大きいビルに住んでいた。

神田さんの正体がわかった。簡単に、結論からいうと金持ちだ。
国連捜査官という職業らしい。
世界各国を飛び回り、国際事件を捜査をするお仕事だそうだ。

『シャンパーニといえば外国人の多い繁華街だが
その中で一際目立つ塔が立っている。それがシャンパーニの塔だ。
オフィスはもちろんや病院、美術館、ジムまでもが入っている巨大
建築物であり、特に高層階の住居とは
ここにオフィスを持っている企業の社長達が住んでたりする超高級
住宅なのだ』
スライムが説明してくれた。

『塔を中心に他にもビルが立ち並び「シャンパーニ・ヒルズ」と呼ばれている。また住む人はヒルズ族と…』
とサマヨウヨロイも続いていく。何なんだおまえらは。
とにかく野に住むゼリーとヨロイが知っているぐらい有名で、金持ちが住む家だった。

「ネクタイは似合わないのだが」

と言って裸にネクタイをしていた神田さん。もう病気ではないかと心配になってくる。
どうみてもバカなのだが、この家の主だという。
この世は不思議なことばかりだ。

それから荷物をまとめて馬車に乗り、村を目指した。
強力な用心棒として神田さんが控えていたので
行きのような心配もなく帰ることができた。
馬車もまた速く、数時間で着いてしまった。

「困ったことがあったら言ってくれ。一肌脱ぐよ。」

ヒルズ族の神田さんとはここでお別れ。
一つを除けば、誰よりも尊敬できる人。それが神田さん。
それ以上脱ぐならば、中身が出るとかツッコまないのは大人のマナーだ。
パンツにネクタイの捜査官は去っていった。

また村に帰ってこれた安堵感は大きい。
だがまず、アンジェリーナちゃんの家に急いだ。

次回へつづく。

冒険の書１８　今、踏んでください。

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人。
お返しにスライムの帰郷に協力することに！

いろいろな苦労の末、帰郷に必要なお供の仲間と
旅費（勇者の預金）を手にいれることができた！！

これでスライムが帰る準備はそろった。
村にも戻り、村人の恩返しは終わった！！
だがアンジェリーナちゃんの様子がおかしい！？

――――――

以前は城下街に住み、超有名進学校に通っていた才女なのだ。
それでいて誰にでも気取らず、優しく、なにより絶対的なカワイさは
まさに宮崎あおいちゃんのごとく前世は天使に間違いないほど
ほんと宮崎あおいちゃんって、世界で1番可愛いんじゃないかと思
う。

そんな彼女とオレは結婚して、ジョリーパスタ・二代目オーナーと
なって
天使の妻と可愛い子供達に囲まれて幸せな生活を送る予定を考えると
子供を作らないといけない件が急務かと思われるので
アンジェリーナちゃん、よろしくお願いいたします。

タツローも来ていた。毎日お見舞いをしているという。
アンジェリーナちゃんは、勇者が死んだ夜から様子がおかしく
いろいろなことを忘れてしまったようだ。
それは全てではなく、覚えていることもあるらしい。
具合を説明してくれた。

城下街から連れてきた医師の診断によれば
どうしてそうなってしまったのかは分からないと。
そして記憶は戻るのか、どうすれば戻るのか、
何も分からないというお手上げものだったそうだ。

原因はわかっている。オレなのだ。
例の夜からというのだから間違いはない。
あの時、オレが使ったキエサリ草だ。

キエサリ草は姿が消えるふしぎな草らしいが
オレが使った偽物は「記憶がキエサリソウ」というドラッグだった

こと。
衝撃的な殺人現場に居合わせてしまったアンジェリーナちゃん。
その場を忘れさせるべく、オレはその草を使ったのだった。
一時的なものかと思っていたが、こんな結果になってるとは。。。

よくわからないものを使ったオレが悪い。
それ以外は、健康で元気だという。
命に関わる障害じゃないのは不幸中の幸いか。
だが、人の今まで積み重ねてきた記憶を忘れさせてしまった罪は重い。
家族にも、多大な迷惑と心配をかけてしまっていることに心が痛む。
しかし、見かけは全く変わらない。
相変わらず絶対的天使のアンジェリーナちゃんのままだ。

「タツロー、サーフィン」

アンジェリーナちゃんは、タツローの背中に立っていた。
人を踏んだりなど考えられない子だったが、性格的に少し変わってしまったところがあるらしい。
踏まれながらに説明してくれたタツロー。
時折、快楽に溺れた顔を見せていたタツロー。
オレに心から軽蔑されたタツロー。
そんなタツローの毎日お見舞いの謎は解けたところで、オレは家に帰ることにした。

記憶を戻すのはオレの責務だ。
どうすればいい。何をすれば戻るのだろうか。
アンジェリーナちゃんを元に戻したい、タツローは死ねばいい、心から願った。

――――――

そんな、なんとも立派で穏やか風な話と、協力してもらえるのかは別の問題だ。
それなりの覚悟もしておいたほうがいいだろう。
アンジェリーナちゃんの過去と引き換えに
魔王との契約にサインすることになるオレは、魂を抜かれ
魔物となり夜な夜なうろつき、殺され、
腐った死体となって甦り、死肉を喰らい、
顔を整形した元黒人のバックダンサーとして踊ったりとか
外国の女警察官に撃たれるゲームのバイトをするとかして
何とか生計をたてねば。。。
いろいろ考えておく必要もあるだろう。
いかなるときでも「生活」を考えた人生設計を事前に練らなければならない。
大人とはそういうものだ。

つまりは、元魔王ほどの科学力ならば、見込みがあるのではないだろうか。
それらがこのアンジェリーナ問題の解決に繋がるのかは、全く分からない。
しかし、現時点において考えられる可能性は他にはない。

「・・負けたからクズってことじゃなくて　可能性を追わないからクズ・・・・・！　」

書くまでも無いが、聖書といわれる『賭博黙示録カイジ』の中にもそうある。
可能性を追わないのはクズなのだ。

そして、なにより仲間の後押しがあったこと。
スライムは、その「都」の郊外に住んでいるんだそうだ。

連れて行ってはくれないかと頼む前に
「いっしょに来ればいい」　と言ってくれたスライム。
「帰りが寂しくなくて、ありがたい」　と言ってくれたお供のサマヨウヨロイ。
そんなＹＥＳ以外の回答が無い場が発生してしまったこともあって
正直、仕方ねぇな、みたいな形でついた決心だったことは、墓まで持っていこうと思う。
本当に、いい友達をオレは持った。

スライム達の呪いが解ける明日に出発することに。
準備はできている。明日だ。

――――――

重厚な鉄塊が板男を圧殺した。サマヨウヨロイの足だ。
至福の表情のまま、タツローは逝った。
気を失っただけ。安らかなれ、タツロー。

そのとき、アンジェリーナ様はひくほど笑っていたんだ。

違和感はあった。このときに引き返すべきだったんだ。
以前のアンジェリーナちゃんではないサインが出ていたじゃないかと悔やまれる。
この時の違和感をどうして、どうして、見過ごしてしまったのだろう。。。

馬車は裏門を通り、村外へ出てさらに進んでいった。
このときにはボクらは、まだ何も知らない。
ウブなボク達3人を乗せた馬車が、地獄へ向かっていることに。。。

次回へつづく

冒険の書１９　オデンティックあげるよ

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人。

スライム帰郷の準備も無事終え、ようやく一安心。
だが、勇者殺害現場にいたアンジェリーナちゃんの記憶が
なくなっていた事実が判明！

原因は村人の使ったキエサリ草（偽モノ）！！
アンジェリーナちゃんの記憶を戻すべく、モンスターの都に連れて
いくことに！
しかし、アンジェリーナちゃんが様子がいろいろおかしい。。。。

ーーー

いと言うスライム。
それが確実で1番早いだろうと。
そして、元魔王のいる「都」と呼ばれるスライムの里へは海を渡るらしい。

アンジェリーナ様は嬉々としていた。
不安な事実なんて教える必要は無い。本人のためだ。
誤魔化してでも都へ向い、とにかく元へ戻ればいい。
魔物の巣へ行くことに危険は極まるが、スライムが絶対に安全だと断言した。
それならば、と信じて決行を思い切った。

「ゼリィちゃんでいいかな」
「後ろお願いね、ナイトさん」

賑やかで楽しい道中になるだろう期待に心は踊っていた。
今回は金もある。馬車は最新式の高級車だし、魔物よけの準備も万全だ。
そんな中を、女の子といく旅行の楽しいことと言ったらない。
ましては可愛いアンジェリーナ様となら最高だ。

もう悪臭ヨロイの中で寝たり、
汚いケツを見せられる変態事故もない。
ロクなことのない今までが報われていいはず。
それなのに。。。

アンジェリーナ様だが、以前は動物も労わる優しい子だった。
ふざけているレベルとしてだが、スライムの上に座り、
サマヨウヨロイをカンカン叩いたりしていた。

この変貌ぶりはどうしたことだろうか。
記憶がなくなったというキエサリそう（偽物）。
内面まで変えてしまうのだろうか。全てはオレの責任だ。

しかし、スライムもアンジェリーナ様にお尻を乗せられ、まんざらでもないし、
サマヨウヨロイは体を触られ、ご満悦だ。
問題はないとしても、なんだか見慣れない。

アンジェリーナ様はスライム達とも親しくなるのに時間はかからなかった。
とくにサマヨウヨロイはメロメロで、すっかり姫と騎士気取りだ。
いいところを見せたいのだろう。
寄ってくるハエにまで刀を振り回す始末で、とにかく危ない。
そもそも、たいした腕でもないのだからやめてほしい。

ハエはヨロイ自身の異臭に寄って来ているのだが、そのことには触れられない。
だってそうじゃないか。
「臭いの元から断たないと」なんて「くさいオマエは死ね」と同意味だ。
こんな思春期を見せるヨロイには残酷すぎる。その言葉だけで死んでしまうかもしれない。
何より、臭くても人にクサイとかは言ってはいけない。

「おでんが食べたい」

アンジェリーナ様はわがままなことを言う。
カワイイと全てが許される。「現実」と書いて「フコウヘイ」と読む、この世。

キャンプで「おでん」などあるかと思うところだが、幹事ぶりに定評のあるオレにぬかりはない。
ダシの効いた香り立つその仕上がりは、味・風味ともに申し分ない。
つまりは、出来上がったおでんは美味しかったってこと。

「あーん、してあげよか」

アンジェリーナ様は、意外なおでんの準備と手際の良さにご機嫌だった。
ここで、この旅の最大のイベントについてに書いておかなければならない。
馬車にはベットが2つあるのだ。
1つはアンジェリーナ様用として、隣のもう1つは空いている。
夜になれば、そこは今旅のメインステージとなる予定だ。
隣のベットで寝られれば、自然な流れからアレがアアなって。。その通り。
「あんっジェリーナ計画」と呼んでいる。
オレはキャンプが決まった三日前から、この計画に生きてきた。

そういうわけで「おでん」の準備もリサーチ済みの所業だ。
多少のストーカー行為はご愛嬌。まずは敵を知る。
勝負とは試合の前に決まっているもの。兵法の基本である。

「ちょっと裸になってくれない？」

アンジェリーナ様はそういってオレの服を引っ張ってきた。
計画などいらなかったのだと。あっさり、ミッションコンプリート。
お互い楽しめばいいのさ。忘れられない夜にしてやんよ。
のはずだった。
しかし、現実は違った。兵法の基本はホント信用できない。

オレが性意を込めて作った、アツアツおでんを体にくっつけられた。
何を考えているのかわからない。狂気の沙汰。
オレの悲鳴を聞くほどに、アンジェリーナ様は加減と正気を無くしていった。

オレは体は熱いが、冷静だった。
裸であれば、そのまま「あんっジェリーナ計画」へ移行すればいい。
好都合。罠にかかったのは貴様だと。
このまま機嫌をキープすればいいんだ、耐えるんだ。
キープ力に定評のある松山クンよ、どうかオレに力を貸してくれ。
ちなみに松山クンとは、あの北海道は「ふらの中」のキャプテンの松山クンだ。
今に決めるぜ北国シュート。もちろん、性的なゴールネットに突きささ…。
何を書いているんだオレはバカか。
そんな思いがオレを何度も立ち上がらせた。
転がりながらも、エスカレートしていく狂気に向かっていった。

サマヨウヨロイはまだ刀を振り回していた。
これはまぐれで一度だけ小さなハエを両断して、アンジェリーナ様に褒められたことに起因する。
それ以来、注意しても刀を収めないのだった。
言わんこっちゃない。
刀は鍋の端に当たり、アツアツおでんの全てをひっくり返した。
ちょうど下に転がっていた裸のオレは、全身におでんを浴びた。
本来なら、即救急車レベルの事故だ。よく生きていたと思う。

アンジェリーナ様は黙りながら怒っていた。
「急にハエが出て来たので」とか言い訳をする鉄クサヨロイは、

さらにアンジェリーナ様の怒気を逆なでした。

オレはダメージが大き過ぎて、悲鳴も上げられなかった。これがホンモノの事故のリアル。
でも、そんな時になんだが、カワイイ子が怒るって興奮するよね。
意外な怒気にドキドキしてしまうんだ。
普段見れないものを見たような、そんな感。
これはオレ固有の変態性であり、自覚もしているので許されたい。
「怒気怒気(ドキドキ)した」とか親父ギャグも甚だしい。オレは思ってない。

それから必死に謝る鉄クサヨロイは哀れで仕方がなかった。
「アンジェリーナ様」とか呼び出し、土下座をして勝手に忠誠まで誓って見せた。
こいつがこんなにダメ男だったとは。

「ば・つ・げ〜む♪」

とアンジェリーナ様は言って「魔物避けよけカード」をサマヨウヨロイから取り上げた。
スライムとサマヨウヨロイには魔物避けよけを持たせていた。ややこしい。

馬車には魔物避けマシンがついている。
人体以外の肉体構造に、何らかの影響を与えるマシンらしい。
「魔物避けよけカード」はＩＣチップを搭載し、影響を中和するカードタイプのマシンだ。
影響の対象となるスライムとサマヨウヨロイは、そのカードをぶら下げていた。

サマヨウヨロイは悲鳴あげ、転がり狂った。まるで地獄。

カードが無い、つまり近づいたモンスターはこんな風になるのか。
しかし、これを通して、魔物避けマシンの品質は確認することができた。実に頼もしい機器だ。
転がるヨロイを見て、アンジェリーナ様は爆笑していた。ねぇ、何がそんなにおかしいの？

アンジェリーナ様はみんなの悲鳴が実に面白いと言っていた。
そんな訳の分からない感想はいらない。パンツの１つでも見せてくれたほうが報われます。
一頻り満足したようで、「寝よっか♪」と言って馬車に入り鍵を閉めた。。。

以上終了。異常終了だ。
見返りなしの裸男。あんまりだ。今日はこれまでか。。。
しかし思いのほかダメージがヒドイ。
オレは体が真っ赤っ赤だし、サマヨウヨロイはもう動かない。明日はすこし休むか。
さり気なく、スライムもなかなか重傷だった。
長時間、アンジェリーナ様が座っていたため、大きくへコんで元に戻らない。
完全にフォルムが変形している。踏まれたウンコみたいになっていた。
「左右対称じゃないとイヤだ」と激しく気にしている。
「だいじょうぶ」とオレは励まし、顔をそらして笑った。

サマヨウヨロイが気がかりだった。死んでないことを祈った。
オレは走り寄って「魔物避けよけカード」をかけてやり、抱えて起こしてやった。
サマヨウヨロイはわずかに意識を取り戻した。

「くっさっ。　オマエ、おでんクサっ」

介抱してやったオレに対する、第一声だ。
オレはサマヨウヨロイの「魔物避けよけカード」を
残された力の全てで奪い、ブン投げた。
カードのランプがまるで流れ星のように、夜空に吸い込まれて消えた。

――――――

冒険の書２０　オレは犬。負け犬じゃなくて犬。

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人。

だが、勇者殺害現場にいたアンジェリーナちゃんの記憶が
なくなっていた事実が判明！

原因は村人の使ったキエサリ草（偽モノ）！！
アンジェリーナちゃんの記憶を戻すべく、モンスターの都に連れて
いくことに！

いやらしい計画を企む村人だったが
アンジェリーナの奇行に手痛く散る。
そんな旅も２日目。アンジェリーナが馬車ごと消えてしまった。。。

ーーー

昨夜はオレの思惑に反して、外で寝た。
しかし、すこしも取り乱さず、静かに寝るオレ。
あんなに頑張ったのに。。。とか未練に振り回されてはならない。
経験の浅い小僧であれば、あきらめきれずに無駄あがきしてしまうかもね。
ただチャンスを待つ。この「待つ」が出来ないやつが多い。
結論を急がない。これがオトナのハンターだ。

そんなオレのアダルティで昨夜は辛抱したのに、
朝になると肝心のアンジェリーナは馬車ごと消えたのだった。
夜中に何度か、中を覗こうとチャレンジした時には、まだ馬車はあった。
カギもしっかり、かかっていた。
こちらも夜中に何度も、ピッキングを試みてもダメだったから間違いない。
つまりは、それ以降に消えたことになる。

1人でどこかへ行ってしまった？
彼女は行動が読めないところがある。考えられないことじゃない。
女の子1人、この魔物のうろつく野外を進んでしまったとしたらマズイ。
優れた魔物避けマシンを乗せているとはいえ、危険すぎる。
一刻争う。直ちに捜索へ向かうことが決まった。
オレ達は出発へ向けて、片付けやら準備を急いだ。

スライムとオレには持ち歩けない、大きな鍋があった。
おでんに使った鍋だが、持っていくかどうか、揉めた。
サマヨウヨロイは持ちたくないようで、なにかと不要な理由をつけてくる。
鍋の大きさは、1番食うヨロイに合わせた容量なのだ。

それだけでも持つ理由になるだろう、というのに聞かない。

ここで日常の超常現象について書いておこう。
サマヨウヨロイに食われたモノは消滅する。
中身は空洞のままなのだ。どこへいく??
今さらだが、ヨロイの中に入って寝ていたことが恐ろしい。
「サマヨウヨロイは4次元空間と繋がっている」
という解釈にいき着くのがドラえもん世代の限界だ。
つまりは、食う意味が疑わしい。エネルギー源になっていない気がする。
しかし、ドラえもんも食卓についていた、いう事例から与えてきたのだった。

鍋は自分(ヨロイ)の兜で代用すればいい、とか無茶苦茶なことを言うサマヨウヨロイ。
頭部で調理とか気味が悪いし、一体、お前はどうやって食うのだとスライムが無茶を説いた。
臭くて使えないとは言わない優しさ。

「オレは食わなくていい」

だそうだ。やっぱり。オレの仮説は正しかった。
サマヨウヨロイに食事が無意味なことが判明。
自然と、今までの無駄だった食事代へ話題は移り
「今までかかった食費は働いて返す」というサマヨウヨロイの自滅により、事態は収拾した。
また、今まで通り食う許可と、盾として使えるという理由もあって、やっと納得した。
たかだか鍋1つ持っていくことに2時間もかかった。
無駄な時間を使わせやがって。

これで出発。のときに、騒ぎ始めた奴がいた。
馬車の金。大金が積んであったのだ。
まさかと思われるが、サマヨウヨロイは「油断した」とか「やられた」とか大騒ぎし始めた。
金の持ち逃げだと思い込んでる。いなくなった心配より、早々の犯人扱いだ。
金は車内の目立たないところに隠してある。
見つけられたとしても、それはない気がするオレは甘いのか。

とにかく、考えることは2つだ。来た道は1本道。戻ったか、進んだか。
スライムは風向きと匂いの有無から、先へ進んだと推測した。
しかし、サマヨウヨロイは先へ進む理由がないと譲らない。まただ。
金を持って逃げ帰っただけだと言って聞かなかった。
そんな話合いも1時間が経ったとき、戻り方面から旅人が来た。
昨日から歩いてきたが、見ていないと教えてくれた。戻った説が消えた。

「結局は2択の問題だから」

サマヨウヨロイが自己弁護にしつこい。1時間は弁明していた。
誰も責めてないと言ってんのにクドイ。

そしてやっと出発。。。の前に、スライム&サマヨウヨロイをオレは問い正した。
馬車の発車に気がつかないとはどういうことかと。
気が緩んでいる。野に身を置く魔物としても失格じゃないか。
サマヨウヨロイは言う。

「あの馬車ってすごい静かだよね」

確かにオレが選んだ馬車は自慢できる。
あまりに静かな走り出しには耳を疑ったほどだ。
「水準の高いベアリング技術が伺える…」とうなずくスライム。
おっしゃる通り。高級車の品質とは恐れ入る。
それから「コーナーでの重心移動と傾き」について2時間、
またそれらを実現する、「足回り設計」について2時間ほど議論した。

「走り出しに気がつかないとしても、責任は問えない」

という結論を出すことができた。
とても有意義なディスカッションだったので、3人で議事録を書いてみました（笑）
だんだん暗くなってきて、1時間しか無かったが、よくまとめられたと思う。みんなお疲れ。

こうして日も落ちて、本日のアンジェリーナ捜索は終了した。。。

深刻な事態に眉間のしわは取れない。
見つけることができなかったのだ。残念。
馬車の足は速い。しかし、心配はいらない。
今までの長い旅によって、オレたちの足腰はアスリートに近い実力を備えている。
明日から頑張ろう。明日からはちゃんと争う。一刻を。

――――――

馬車返せや。ふざけるな。
歩くのすげー疲れたし。

もうムリ。
彼女なにしてるわけ？バカなんじゃないの？
「あんっジェリーナ計画」とかオワタ。
「あんっジェリーナ計画」のメモはビリッビリに破いて、オシッコかけて埋めたった。
なんだか悔しくて。あんなに頑張ったのに。

俺達はひたすらに歩いた。
進んだ道先に虫が横たわっていた。
キャタピーという種の巨大なイモムシで、通り魔にやられたという。

昨日の朝だそうだ。
後ろから猛烈な勢いで来た馬車にハネられたらしい。
イモムシは危険を察して、脇に寄って道を譲ったが
馬車は狙い済ましてハネていったという。わざとか。
そのまま走り去っていったそうだ。

アンジェリーナなのだろうか。
アンジェリーナは狂気のような攻撃性を持っている。
時間的なつじつまも合って否定できない。
犯人は身内の人間かも知れないと
オレは手持ちの薬草を使い、手当をしてやった。

するとイモムシは突然に襲いかかってきたのだ。

次回へつづく。

冒険の書２１　壊れかけのタツオ

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人。

だが、勇者殺害現場にいたアンジェリーナの記憶が
なくなっていた事実が判明！

原因は村人の使ったキエサリ草（偽モノ）！！
アンジェリーナの記憶を戻すべく、モンスターの都に連れていくこ
とに！

そんな旅もまだ2日目にアンジェリーナはいなくなる！
捜索に向かう村人たち。
そこでケガをしたキャタピーを助けるのだが。。

ーーー

村を出る前にしていた話。
道中での魔物との戦いにおいて
そのために、スライムやサマヨウヨロイが控えているわけだが
彼らがサポートしきれない場合もあるかもしれないという。
確かに、ホントのピンチになってから、己の非力を嘆いても遅い。
自分自身をそれなりに守る力が必要だ。
という訳で、今旅中ではオレの訓練が課されていた。

「モンスターを退治する、といった成功体験がレベルアップに効果的なんだ」

得意げなサマヨウヨロイの言葉が思い出される。
この分野「戦闘」については、サマヨウヨロイが一番長けている。
なぜならば、大学で専攻し、大学院にまで進学して専門的に学んだそうだ。
「戦闘のプロ」と自称している。確かに、説得力のある肩書だ。
スライムもそこに信頼をおき、優れた用心棒として声をかけたものらしい。

とにかくパニックになるな、とか
冷静に戦況を見極めて、最後まであきらめるな、など
それっぽい知識を披露しており、さすがは修士と一目置いていた。

「本当に危ないときは、すぐに助けるから」

と心強い。実に頼もしい話だ。
安心して訓練を積むことができそうだと、オレもそれなりに気合が入っていた。
今回のこれは「やってみろ」ということだと、オレは解釈した。

このイモムシは図鑑でみたことがあるため、知っている。
キャタピーといって、小さな丘ぐらいある超巨大なイモムシの種だ。
しかし、コイツはまだ若いキャタピーらしく、すごく小さかった。
小さいといえ、大型犬くらいはある。充分、脅威だ。

ずっと鍛えてきたんだ。家で時々。
手負いの幼虫ごときにヤラレはしないだろうと。
頭に来ることもある。
若さゆえの「常識がない」や「礼儀がなってない」とは、社会でもままあることだ。許そう。
しかし、助けた人に襲いかかるとか、パパ絶対そういうの許さない。
社会のルールを学んで、森へお帰り王蟲（オーム）。
気分はナウシカだ。

「オオオっ！！」

オレの思わぬ攻勢に、思わずスライム達があげた歓声だ。
オレはイモムシを後ろから抱え、高々と持ち上げたのだ。
いち村人もバカにしたもんじゃない。
実は、見かけによらず、このイモムシすごい軽い。
そしてイモムシは、初動のオレへの攻撃から動かなかった。
どうやら、傷が痛んだらしく、まともに動けない様子に見える。
冷静に状況を把握。オレは教えられた通りにできていた。
そして、イケると踏んだ。

弱っている今こそ勝機。勝負とは一瞬だ。
チャンスに一気に決める。ここを迷うのは二流である。
このまま「ジャーマンスープレックス」で一気に決めようと。
「ジャーマンスープレックス」とは敵を後ろから抱え、持ち上げ、

後方ブリッジで叩きつける大技だ。やったことはない。
だが、ジャーマンほどの大技ならば、さらにギャラリーも沸いて、
歓声を得られるだろう。
持ち上げたまま、後ろへブン投げようとしたときだった。

「たつおっっ！」

大声が響いた。
次の瞬間、前方の森が隆起した。モリがモリ上がったのだ。
だが正体は森ではなく、図鑑で見たキャタピーの成虫だった。
このイモムシの親だと察した。

容易く木々をなぎ倒しながら、突っ込んでくる。
かつ、超デカイ。即ギブ。
ホントの危ないときはもう来た。
イモムシを離し、助けを呼ぼうとした瞬間
サマヨウヨロイが、オレのすぐ前に現れ、構えたのだった。

そのでかい背中が、なんと頼もしいことか。
サマヨウヨロイが仲間でよかった、と心から思った。
他人のピンチを救うことができる強さ。真の強さだ。
オレも、そんな強き力を欲しく思う。
そんな素直な尊敬の気持ちから、先生お願いします！とオレは言った。

「……を、お許しください……」

小さい声が、サマヨウヨロイから何度も聞こえていた。
ヨロイがガチャガチャと音が立てている。
尋常じゃなく、恐怖に震えているんだ。

「先立つ不幸を、お許しください」と言っていると分かった。
マジかよ。なにそれ。どういうことか。
すぐさま、それなら逃げようと
オレはサマヨウヨロイの腕を引いた。
退くも兵法。しかし、サマヨウヨロイは頑として動かない。

「〜してゴメンナサイ」
「〜のときは私が悪かったのです」

ひたすらに懺悔しはじめていた。
すでに、この世をあきらめている。パニックこの上ない。
なにしに出てきたのだ。
約束や守ろうとした責任感と友情には、感謝するが
あの偉そうな態度が思い出される。
正直、大学院までいき、コイツは何を学んできたのだろう。
無事だったから良かったものの。

「人様に何してくれてんだっっ！」

キャタピー（親）の予想外の言葉と行動だった。
キャタピー（親）はタツオ（子）を掴んで、空にぶん投げたのだった。
タツオは空を飛んだ。
落下までかなり時間があったことから、相当な高度まで上がったと思われる。

それからタツオ君の親は謝ってばかりいた。
どうやら、オレが襲われた所しか見ていなかったらしい。
モンスターだが、モンスターペアレントでは無く、良識のあるいい

親だった。。。

「キャタピーは蝶にはなれない」

タツオは事実を親から聞いて、ショックを受けて家出したんだそうだ。
それでいて通り魔にも遭い、自暴自棄になっていたらしい。
タツオは下を向き、落ち込みながらも、小さい声で謝っていた。

「頭の悪い子で申し訳ない」

オヤジさんはそればかりを繰り返す。
オヤジさん、それは違いますよとオレは言った。
タツオの気持ちも分からなくもない。
親の姿から想像できなかったんか？なんてオトナの理屈。
若者には若者の自由な夢があって普通。理想があるものだ。
自分にも、そのぐらいの年の頃には、無謀な夢があったことを話した。
オレだけでも理解してあげようと思う。

タツオは馬車にハネられて、そのまま死ぬつもりだったらしい。
よく見れば、突き指程度のケガだ。それだけで横たわっていたタツオ。
かわいいじゃないか。
思春期の時なんて、みんな横たわっているものさとオレは、タツオを勇気づけた。

それから、オヤジさんに馬車を見なかったか聞くと、
有力な情報を得ることができた。
なんでも、港へ向かっていく馬車を見たという。

まじか。アンジェリーナの馬車かもしれない。
一人で船に乗るつもりなのだろうか。
たしかにクルージングといって喜んでいた。
急ごうと準備をし始めると、
オヤジさんが、今回のお詫びに港まで送らせてほしい、と言ってくれた。

俺たちはオヤジさんのドデカイ背中に乗り、港へ向かった。
山のようなキャタピーが威風堂々、森を進んでいく。
遥か先をみれば、危険を察したモンスターたちが、蜘蛛の子のように逃げ散っていた。

王者の気分、優越感に酔える。驚きや歓声上げ、騒ぐオレたち。
盛り上がるオレたちを、タツオはずっと見ていたんだ。

どうやら、考えを改めたようだな。そういうことだ。
オマエのオヤジさん、すごく強いんだな。
そんな、キャタピーって、すごくかっこいいぜ。
オレはそういう意味で、親指を立てて、タツオに微笑んだ。
タツオは、パっと明るい表情になって、口を開いた。

「おれ、蝶になれるかな」

だから、なれねーよ！と言って、オレはタツオを蹴とばした。
だってオマエはイモムシだもの！バカヤロウが。

そうこうしている間に、しだいに港が見えてきていた。。。

次回へ続く

冒険の書２２　うまい棒に謝れ！

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人。

だが、勇者殺害現場にいたアンジェリーナの記憶が
なくなっていた事実が判明！

原因は村人の使ったキエサリ草（偽モノ）！！
アンジェリーナの記憶を戻すべく、モンスターの都に連れていくこ
とに！

そんな旅もまだ2日目に、アンジェリーナはいなくなる。
捜索に乗り出す村人たち。
しかし、微妙に乗り気になれない村人たちは
キャタピーの親子に出会いつつ、とりあえず港へ向かうのだった。

――――――

モンスターたちの秘密の船寄り場と聞いていた。
討伐を恐れた魔物どもが、人目を盗んでコソコソと
船とも呼べない木材で出港し、郷里の母や友を目指す。
また、いつ来るかも知れない不定期な船に乗る
我が子や、夫を待つ家族の姿などが想像できよう。

不憫だ。不便では軽い。
栄えあるヒトの文明や文化とは
モンスター達から見れば、考えもしない豊かなもの。
科学をうま味も知らぬまま、朽ちていく魔物たち。涙がでる。
せめて、オレの持つ「うまい棒」をモンスターの幼子に分けてやろうと。
コラコラ慌てるな、順番だ。
ワーい僕はコンソメ味、僕はコーンポタージュ味だ！
モンスターの子供達にきっとそうしよう。
そう誓い、カバンの一番上にプレゼントの『うまい棒』をスタンバイしていた。

きらびやかな商業船や、メカニカルな漁業船が行き交っている。
一際目立つあの塔はなんだと聞くと、『管制塔』といって
全ての入出港をシステム制御しているそうだ。ふざけろ。
最新鋭というべき機器で整備された近代都市、いやそれ以上か。
他にもお店や住宅も多く、港町として大きな発展をみせている。
隠れる気など微塵も無い。

特に、『クリスピークリームドーナッツ』と書かれた
ドーナッツ店がすごい人気。行列ができていた。
たくさんのモンスター親子が並んでおり、子供達のホクホクの笑顔
が眩しい。

魔物が飢えているとは、ずいぶん昔の話らしい。
まだまだ輸入に頼った低い自給率だけれどもね、と
タツオのオヤジさん（キャタピー）は笑っていた。
オレも笑いながら、人知れずに『うまい棒』をバックの一番底に潜らせた。

主旨を忘れてはならない。アンジェリーナ捜索が急務だ。
ドーナッツ屋さんに並んでる時に、前と後ろの人に聞いた。
見てないって。アンジェリーナは今日も見つからなかった。

「昨日も人間が来たよ」

偶然にも、ドーナッツ屋さんが話しかけてきた。
馬車に乗った女の子だったという。アンジェリーナかな。
人間など滅多に見ないため珍しく、よく覚えているそうだ。
どちらまでと尋ねると

「魔王のタマをとりに」

と答えたそうだ。タマってなんだ？
ヤクザな言い回しなら命のことだが
アイツ大魔王でも倒す気かなハハハ。
そんなことより、このドーナッツすげー旨い。
もっちもち。ナイスクリスピー。

ここから出港する船は、必ず都と呼ばれる魔王の城下街に寄るらしい。
当初からの目的地だ。
アンジェリーナがうまい具合にそこへ向かっているのは
全てオレの読みどおりである。本当だ。異議は受け付けない。

まぁ一応、適当に明朝の船に乗って、後を追うことにした。

海を1人で渡るアンジェリーナ。
この遥か海の先か。君は今何を思う。
君の身が心配で、食事ものどを通らない。。。
必ず探してみせる！と誓い、オレはコンソメとかコーンポタージュとか書かれた
棒状の魚の餌を海に砕いてまいた。
うまい棒がこんな末路になったのは、クリスピークリームドーナッツのせいなんだ。
みんなはこんなことしてはいけないと、とりあえず書いておく。

口を開いたまま集まってくる間抜けな魚どもが
先ほどのドーナッツに群がる民と重なって見える。
並んでまで欲した食意地が、恥ずかしくも思えた。
だけど、やっぱりナイスクリスピー。
もっちもちで最高だ。

――――――

高校を勝手に辞めてしまったというキャタピー・タツオ。
行く先不安な若者である。しっかり、送り届けますとオレは約束してオヤジさんは帰っていった。
あまり親に心配をかけるんじゃないとか、タツオにいろいろ教えてやろうと思う。

タツオのオヤジさんが、とにかくいい人で
船のチケット代として全員に１００ゴールドづつくれていた。
チケット代は１人５０ゴールド。
しかし、今日になってタツオは、４０ゴールドしかもってないという。なぜだ。

昨日のクリスピードーナッツの買い過ぎで
自分のチケット代を食いつぶしてしまったのだ。
スライムとサマヨウヨロイは、５０ゴールドずつを残していた。
４人のお金をかき集めたが１４０ゴールドしかない。
２人分しかチケットが買えない。なんていうことだ。

ちなみに計算のできるオレは、スライムナイト状態にすれば１人分は浮くだろうと
つまりは、実質３人分のチケット代で済むだろうと見込んでいたため
全額ドーナッツにして食べていた。
タツオが余計に食べた１０ゴールドが悔やまれる。困った奴。
タツオが悪いとか、そんなことは今は置いておけと。
キャプテンのオレがしっかりしなければならない。
まずは問題解決を優先するべきだ、とリーダーシップを発揮した。

チケットを渡して、モンスターどもが次々と船へ向かう。
ここにあるチケットは２枚。オレ達は４人。

このとき、圧倒的ひらめきが来た。オレは冴えていた。
オレは、サマヨウヨロイの顔のところにスライムを押し込んだ。
前例もあるスライムナイト・スタイルだ。

「スライムナイトです」

チケットを1枚を消費。2人は船上へ進んでいく。
クリアー。当初の予定である。
オレはキャタピーのタツオを紐で繋ぎ、2人で歩いていった。

「盲導犬と一緒でもいいですか？」

目をつぶり、残りのチケットを渡した。
圧倒的クリアー！なせば成る。
こうしてオレ達は漏れなく、船上へ乗り込んでいった。

スライムが珍しく不満げだった。
船の名前が気に入らないらしい。変なことを気にする奴だ。
とにかく、オレたちの乗せた船「タイタニック号」は
ゆっくりと港を離れて海原を進んでいった。。。。

次回へ続く

冒険の書２３　それでも私は売ってない

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人。

だが、勇者殺害現場にいたアンジェリーナの記憶が
なくなっていた事実が判明！

原因は村人の使ったキエサリ草（偽モノ）！！
アンジェリーナの記憶を戻すべく、モンスターの都に連れていくこ
とに！

モンスターの世界に踏み入っていく村人！！
展開される豊かな文明に圧倒されつつ
いなくなったアンジェリーナを追う！！

ーーー

魔王の城下街という「都」へは
早くて１０日間ぐらいかかるそうだ。
到着はまだまだに先になる。

滅多に乗れない大型船だ。
なかなか見れない海景色にも興奮した初日。
今は嘘みたいにアクビが止まらない。
海は、どこまでいっても海だ。当たり前。
今日は基本的にアクビしかしていなかった。

船内には、客向けの放送が流されている。
「ヤマザキ・春のパン祭」がどうだとか
「生涯学習のユーキャン」がなんだとか、
スポンサーがバックについた宣伝ありきの内容で
ますます退屈さを引き立たせる。
魔物がパンのシールを集めたり、通信教育に申し込んだりとか
がっかりである。

その放送の中で、１つだけ気になるものがあった。
水着メーカー主催による、この海の横断レースが行われているらし
い。
オレたちが出発した港から、泳いで都を目指すという凄まじい企画
だ。
船で１０日の距離をだ。クレイジーすぎる。
やはり、怪物（モンスター）の世界に来ているということを認識させられる。

気になることについて。
放送の中で、その横断レースの順位状況が流されていた。
現在の上位集団を、覆面にマントをしている大男が引っ張っている
という。

また、現在1位となるその男は、裸のうえから
なぜかネクタイしているんだそうだ。
耳を疑う。思い当たる人がいる。

放送内では「奇抜なスタイルのトップ泳者」と評されている。
船内には笑いが起こっていた。
明日に船から見える距離に近づくらしい。その時にはっきりするだろう。
「変態」であることは、はっきりしているあの「神田さん」かどうかが。

それまでは、サマヨウヨロイをバラして暇を潰していた。
サマヨウヨロイの鎧は着脱自在。
また、中身はいつ見てもカラッポだ。
いつぞやにもあったにサマヨウヨロイの

「中身が宇宙空間と繋がっている」

いう仮説にトライするときがきた。
今日こそ、かねてからのミステリーに挑むことにした。
世界・不思議発見。気分はミステリーハンターだ。

サマヨウヨロイは、ブザマな寝相を晒していた。
中身がカラッポとはお似合いだな、とはオレは言っていない。
自称・戦闘のプロといい、一応の経歴をもっているサマヨウヨロイ。
いつかの意味不明なヘタレぶりは、まだ記憶に新しく
オレの中では、ある疑惑もまた高まっていた。

寝込みを襲う形になるか。これは不意打ちだ。
さぁ、どう防ぐ。武人ならば、それ相応の反応を見せるだろう。

ヨロイの足からゆっくり外してみることにした。

簡単に取れる。
カブトも小手も胴も。全てが難なく、思いのまま取り外せた。
雑に引っぺがしても、全然起きない。逆にたいしたもんだ。
中身がカラッポとは、本当にお似合いだな、とかオレは言っていない。
疑惑は確信に変わった。でもこれは口にはできない。オレたちは友達だもの。

しかし、このダメな鉄の置物から意外な物がでてきたのだ。
外したヨロイの足の奥で、何かが光っていた。
なんと金の冠がでてきたのだ。
ナゼこんなものがあるのかわからない。
しかし、今分かっていることがある。

この船「タイタニック」は巨大な航海船で各層べつに区切られており
お店はもちろん、カジノや質屋までが完備されている。
特に、最下層には有料のパーティースペースがあるという噂で
夜な夜な、熱いイベントが繰り広げられているようだ。

偶然なのだが、「エルフ」と呼ばれるキレイ系のお姉さんが
友達と楽しそうにパーティー内容について話していたり
パーティードレスに着替えて、９時ごろ下へ降りていったり
泊っている５０５号室の部屋の隙間から
パーティーのチケットとか小物が、たまたま見えたりと
いろいろ偶然から知り得たこともある。本当に偶然だった。
とにかくオレもパーティーに参加したい。だが、オレ達には金が無い。

もちろんのモチロン、分かっている。
金の冠は彼の体からでてきたのだから。
これはサマヨウヨロイの物だから。
これを勝手にカネにするとか、ありえない。

しかし、考えなければならない。
この王冠には、サマヨウヨロイも気が付いていなかったに違いない。
あの金にうるさいサマヨウヨロイが
あの口ばかりのサマヨウヨロイが
あのバラバラのサマヨウヨロイが
こんな無防備に持っているはずがないのだ。
きっとこれは本人も知らない、たとえば、ポケットに入れ忘れた
ティッシュみたいなもんなんだ。
洗濯の時、ポッケにティッシュを入れたままで出したら、お母さん
に怒られてしまう。
ティッシュは洗濯機だとバラバラに散ってしまうものね。今のサマ
ヨウヨロイのように。
だからティッシュは取るに限る。
そうだな。仕方ないやつ。取ってやるか。
これはサマヨウヨロイのためだ。

洗濯の時、取ったティッシュの行く先なんて知ったことじゃない。
ゴミ箱だろうが質屋だろうが、どうなろうとも知る限りじゃないし
責めることはできないって言ったら
責めることはできないのだ！

――

１１月１４日

オレの王冠。これがなんと。
あのロマリア王の冠だというのだから驚きだ。
以前のロマリア・テロの時に王がサマヨウヨロイの中に身を隠していた件。
中に落としていたらしい！

「……１０００ゴールドだな」

質屋のオヤジが汚い。
よく出来ているが、ありふれたレプリカだの、年代が古いなどたいした価値はないと言いやがった。

あのタヌキめ。騙そうとしやがった。
素直で純粋なオレは、それで充分だと言い、換金しようとした。
そのときだった。

何かが、もの凄いスピードで飛んできた。
質タヌキはとっさに避けたが、滑ってよろけて、大きく体勢を崩した。
飛んできたものは、サッカーボールだった。

質タヌキの背になっていた壁には、王冠のポスターが張ってあった。
びっくり。持ってきたオレの王冠とそっくりではないか。
加えて、大きな字で「買い取り額１０万ゴールド！！」と書いてあったのだ。
詐欺タヌキは隠していたのだった。

詐欺タヌキの手に持たれた王冠は、吹っ飛んだらしく
転がって、ある男の子の前で止まった。

いつの間にか、さっきのサッカーボールも足に止めている男の子。
この子が蹴ったのだ。
メガネをかけ、蝶ネクタイをしている。小学1年生ぐらいか。すごく小さい子だ。
現れた男の子は、王冠を拾い上げてこちらへ寄ってきた。。。

次回へ続く

冒険の書２４　つばさ君の信頼は絶対なのだから

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人。

だが、勇者殺害現場にいたアンジェリーナの記憶が
なくなっていた事実が判明！

原因は村人の使ったキエサリ草（偽モノ）！！
アンジェリーナの記憶を戻すべく、モンスターの都に連れていくこ
とに！

いなくなったアンジェリーナを追い船に乗る村人。
航海も半ばに、ひょんなことから王冠を手に入れた村人は
王冠を換金すべく質屋へ。
すると王冠が驚きの価値を見せた！！

ーーー

オレ以外にも人間が、極小数ではあるが乗っている。
エドガワくんもその内の1人だ。
ご家族と旅行中であって
モンスターの知り会いに招待されて、この船には乗っていると聞いた。
彼らもまた、ただものではない家族なのだろう。

「あれっ？これポスターとそっくりだね」

王冠とポスターを指差す子供。
低学年くらいかな。
見た物をそのまま声をあげちゃう無邪気な子どもだ。
こんな小さい子供が質屋の詐欺を暴いてくれた？
なんてことはない。偶然だろう。
しかし、エドガワくんのおかげで質屋に騙されずに
大金と換金することができたのだった。

ポスターによると、この王冠が並の物ではないことが分かった。
ロマリア王家に古くから伝わる歴史ある代物で
先日に紛失が判明したらしい。
これがコレクターたちの注目するところとなって
その価値はさらに高まり、ポスターを掲げて
探索するほど、レアアイテムとなっているとのことだ。

あの時。
ロマリアの闘技場テロ事件が思い出される。
ロマリア王をかくまってやった時だ。
以来、ウチのサマヨウヨロイが持っていた（中に落ちていた）ということか。

エドガワくんはお城に返してあげてという。
質屋に入ると闇市へ流され、もう発見はほぼ不可能になるらしい。
エドガワくんが説明してくれた。
小学生のくせによく知っている子供だ。

そして、その通り。持ち主が判明したのだから返さねばならない。
これはロマリア王のもの。
これからとる行動はそう。１つしかない。

お礼と言って、２ゴールドもする特大ソフトクリームを
贈りたいとエドガワ君の気をそらそうと努めた。
「煙に巻く」ならぬソフトクリームで巻きにかかったわけ。
しかし、なかなか手ごわい。いらないというのだ。

ならばと太っ腹なオレは
１０ゴールド以下ならなんでも買ってあげる
という破格の条件で勝負するしかないと思ったそのとき、
高校生くらいのお姉さんらしき女の子が迎えにきた。
オレは自分の運が恐ろしい。
女の子は「どこに行ってったの！？」と叱り、
軽々とエドガワくんを抱っこして連れ去ってくれたのだった。

「ばーろーっ！」

エドガワくんの吐いた捨てゼリフが印象的だった。
小学生に「ばかやろう」って言われた大人は
良心が痛むかって？
大人の階段を上ぼりきったオレぐらいになると
１ゴールドも使わずに済んだ現状を喜ぶのみだ。

君はまだシンデレラさ。

大金を手にして目指すは1つ。
当初からの目的である、船内ギャルが集まるとされる地下パーティーだ。
とくにはこの船で一際目を引く、美しいエルフ族の皆さんと
まずはお近づきになりたい。

オレはまず、船内の洋服店で服を新調しようと決めていた。
この船、豪華船タイタニックの店ぞろえには恐れいる。
あらゆるジャンルの品物を取り備えており
船にいながら、まるで百貨店にいるようだった。

今着ているスーツ。
以前にデパートで買ったモノだが、
ここまでの修羅場をくぐり抜けてきており、もはやスーツとは言えないのだ。
これはいけない。イケテない。
これからクラブのギャルとよろしくするのだから。

場に馴染じむ身なりを考えなければならないということ。
前回から学んだこともある。
白いスーツに「アイパー」と呼ばれる髪型のこのスタイルはモテなかった。
むしろ、人から避けられてるぐらいの不評ぶりで
ミスチョイスと反省させられる。
聞くところによれば、今のこの白スーツ・アイパーは「極道」という道を極めんとする
求道者のスタイルらしい。近寄りがたいはずだ。

店員さんにイケテる服を教えてもらうか。
ありえない。田舎者だと思われてしまう。
ショップの店員さんもエルフ系で、とても可愛い手前もあって
そんなダサいことはできなかった。
エルフ族は本当に可愛いんだ。
パーティーへ参加することが必須であることを
ピンときたオレの下半身が再認識させてくれる。
そんなわけで自分で選んだ
といっても、結局、わからなかったので
飾ってある人形が来ていた服を上から下まで全部もらうことにした。

1つだけ、かなり前に出されていたマネキンがあり
そいつが着ていた服なのだが、何か他と違うらしい。
そのショップが大プレッシュで売りに出している上下であり
「益若つばさ」
というカリスマと思われる人物が推奨したコーディネートらしい。

ピンときた。ここは下半身ではない。
「つばさ」といえば「キャプテンつばさ」。
かつてはサッカー界を圧巻し、今となってはフッション界をリード
しているらしい。
相変わらずのキャプテンぶりである。

つばさ君の本名が「益若」というのは知らんかったが
きっとフッション業界においては、フルネームで活躍しているとい
ったところだろう。
間違いはない。つばさ君への信頼は絶対だ。
オレはつばさ君の相棒、みさき君レベルでつばさ君の意図を理解す
ることができる。

「マジですか？」

これをくれといった時のキレいなエルフ族の店員さんの反応だ。
つまりはあまりの太っ腹すぎるな買い方に
店員さんもびっくりしたらしい。
金持ちってびっくりさせちゃうから罪だ。

支度は整った。時が来るのを待つ。
チェックの単パンに黒の長いタイツ。
オレの下半身は、これでいいのだろうか。正直、気持ち悪い気がする。
長旅によって鍛えられたオレの足腰は、それなりに筋肉が隆起している。
タイツ上からその様子がよく分かり、ゴリマッチョでセクシィという意図だろうか。
そもそも、男が着る服じゃないのではという不安は
きっと気のせいだ。つばさ君を、オレは信じる。

苦しかった過去が想い出される。
またまさか、金持ちになれるとは。完全に返り咲いたのだ。
オレの人生の楽しい部分は今からだったなんて
神さまのイジワル、そしてありがとう。
それではこれからパーティーに行ってきます。
きめるぜイナズマシュート！
――

１１月１７日

風が語りかけてくる。

もう、地獄は抜けたんだよ　と。

なぜ。
なんでこうなるんだ。

簡単に、結論から書く。

三日前、船が沈んだ。。。

次回へつづく

冒険の書２５　星になったワニ

前回までの村人の日記は……

勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人。

だが、勇者殺害現場にいたアンジェリーナの記憶が
なくなっていた事実が判明！

原因は村人の使ったキエサリ草（偽モノ）！！
アンジェリーナの記憶を戻すべく、モンスターの都に連れていくこ
とに！

いなくなったアンジェリーナを追い船に乗る村人！！
乗り込みたるは設備充実、憂いなしの豪華客船タイタニック号。
しかし、「不幸を呼ぶ男」である村人に
おだやかな航海は許されない！！

――――――

コッパミジンとなって海の底へ沈みました。
今は助けてくれた魚船に乗り、都を目指しています。。。ありえん。

今となっては夢のように信じがたいが、確かに沈んだ。
ここにあの地獄のような事件を記すことにする。
二度と起こされたくない海難事故の記録して
後世の人には役立てもらいたい。
失われた尊い命たちへの鎮魂にもなるだろう。
けして気分的なウサ晴らし、といったグチの類ではないのだ。

オレはパーティーに参加していた。
船内のギャルが多く集まるクラブでのパーティー。
それはストーキング中のキレイなオネーさん（エルフ）が参加しているパーティーである。
ストーキング術については、オレのようなストーカー高段者ともなると
「ハイスキルすぎて参考にならない」と言われるほどの技と冴えは
———
本題からそれるため、この話はまた今度だ。

オレは最先端に服に身をつつみ、チケットを買いクラブ内へ。
鼻歌交じりでスマートに入ってゆく。
都会派なオレにとっては、クラブなんてものは慣れている。
。。。と言いたいところだが、実際は初めてなもんで緊張した。
初体験による緊張と期待からくる興奮から
呼吸がバカになってしまい、鼻息が暴走していただけとは誰も思うまい。

「つばさちゃんの服だー」

こんな声がたくさん聞こえていた。
オレの服装（益若つばさモデル）がオシャレすぎらしく、
あちこちから視線を集めていた。

しかし、様子がおかしい。
指を指して笑っている。これは笑われているのだと気づく。
赤面していただろう。自信的なものが急速にしぼんでいくのが分かった。
さらにはもう逃げてしまいたい衝動にかられ、帰ろうと思い出口を探した。
ところが、奇跡が起こる。

ギャルが集まってくる。
爆笑している。涙を流している者もいる。面白いらしい。
なんだかよくわからないウチに彼女たちと自然と親しくなれたのだった。
その中には例のキレイなオネーさん（エルフ）もいたりして
もはやミラクルとしか言いようがない。すごく喜んでもらえたらしい。
キャプテン翼こと、「益若つばさ」はちゃんとオレをゴールへ導いてくれた。
翼くんはやっぱり僕らのキャプテンや。

このクラブの話へ。
このクラブは「クロコダイン」といい
船なもんで、海上にて開催される、非常に珍しく人気あるクラブらしい。
モンスター界の芸能人（？）がオーナーを務めており
「獣王クロコダイン」という芸名のモンスターという。

モンスター界ではなかなかに有名な俳優で
今回は乗り合わせていた機会もあって、ゲストとして登場した。
バカでかいワニだ。登場の際には会場では大きな盛り上がりをみせた。
無論、知らないオレは、空気に任せて適当に拍手だ。

このワニがうっとおしい。
なんでも自分の役者時代の活躍したシーンを
スクリーンに映し出し、なにかとコメントしてくる。
このときは大変だったとか、ここには苦労したとか
正直、誰も聞いていないことをしゃべりだした。
クラブ内の楽しい空気は冷めていったのは言うまでもない。

見せつけられるその内容によれば
「ダイの大冒険」という作品に出演したようで
本人にとって、それが人生そのもののような存在らしく、いちいち熱い。
登場する場面にあわせて説明してくるのだが、それよりも気になる問題がある。
出番はなかなかあるのだが

斬られて、大量出血後、血を吐く
斬られて、大量出血後、目を潰される
斬られて、大量出血後、腕を折られる

ヤラれにヤラれ、毎回に死に損なう1点だ。
もはや、出てこなければそんな目に遭うまいと気の毒になるほど毎回だ。なぜだ。
ようやく終わりかけた最後に見せたシーンに至っては
「獣王」と言いながらネズミの部下になっている。よくわからない。

本人としては熱く語るのだが、役立たずと言わざるをえない役柄だ。
長ったらしい話に、耐えられなくなってきた客たち。
クロコダインの話もそこそこに、私語をし始めた。
皆、１つの同じ気持ちだったに違いない。
先ほどまでの楽しいパーティの空気に戻そうとしているのだ。
場の流れが客たちものに戻りつつあるとき
クロコダインも自分の話を聞いていない様子に気がついたようだった。
やりすぎたクロコダイン。失態と自覚したようだ。
引き時である。これで余興は終わりだろうと誰もが思った。

「今から、うで相撲大会をする」

クロコダインが突然言い出した。頭がおかしい。
唖然とする客たち。表現しがたい空気に包まれる。
この時はどういう理屈でそうなるのか分からなかった。
すぐ後に気がつくことだが、どうやら力に自信があるらしく
今の失態の名誉挽回のつもりなのだ。なんという迷惑。

オーナーだけに無視もできないらしい。
スタッフは仕方なしに準備を始め、屈強な客を選んでステージへあげていく。
客といってもモンスターだ。規格外のパワーを持っている。
その屈強なモンスターたちをバタバタ勝ち倒していくクロコダイン。
無論、クロコダインは得意げのドヤ顔だ。
こいつはコレが見せたかったらしいことに皆が気がついているが
付き合わざるを得ない。
仕方無くな歓声を上げ、時間の経過を待っていた。

悔しかった。
なんでこんなバカワニにオレのハッピータイムを
邪魔する権利があるのかってこと。
オレはサマヨウヨロイを呼んで来た。

サマヨウヨロイの鎧は着脱自在。
その鎧は内部空間が宇宙に繋がっているのではないかと思われるほど
不思議な空間であったり、謎が多いことは前に書いた。
現在、解明されている不思議の中に

鎧の着位置を間違えた場合、一切の動作をしない

というルールがある。
鎧は元の箇所に正しく着けなければ動かないのだ。
オレはサマヨウヨロイの腕を反対に付け替え、ステージへ送り出した。

クロコダインと腕を組み合うサマヨウヨロイ。
体の大きさが二周りぐらい違う。クロコダインのほうが大きい。
クロコダインは、「またザコがきた」と言わんばかりの表情だった。

ゴーっ！

掛け声とともに試合が始まった。
サマヨウヨロイの腕はピクリともしない。
クロコダインの表情は変わる。今まで瞬殺でのしてきたクロコダインだ。

始めの位置から全く動かない。腕の左右を間違えちゃってるからね。
もちろん、サマヨウヨロイも動かせない。まぁ、勝てない。

でも絶対、負けない。狙いはここだ。
オレは一人、ほくそ笑んでいた。
これが異次元空間の力だと。みたかと。ざまーみろと。

でも、これがいけなかった。

クロコダインの顔は真っ赤っ赤だ。全開だ。
サマヨウヨロイの腕はピクリともしない。
そろそろサマヨウヨロイを引き取りにいこうかとした瞬間だった。

「じゅーおー！！！」

「かいしんげき！！！」

後から聞いた話。
「獣王会心撃（じゅうおうかいしんげき）」と言うそうだ。
クロコダインの必殺技らしい。
フルパワーをかき集めたフルフル出力の凄まじい切り札を持っているとのこと。
腕相撲でそんなの使うなよ。

作用・反作用の法則というのを思い出しました。
力の両作用の大きさは等しいというあれです。
つまり、力を加えた側にも、エネルギーとして力が加わっているというアレですね。

サマヨウヨロイの腕はピクリともしない。エネルギーの吸収は０だ。
エネルギーは損失することなく、同じだけ、クロコダインへ返って
いったわけ。

クロコダインは船の外まで吹き飛んだ。

次回へつづく

冒険の書２６　親の仇のごとく

前回までの村人の日記は……
勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人。

だが、勇者殺害現場にいたアンジェリーナの記憶が
なくなっていた事実が判明！

原因は村人の使ったキエサリ草（偽モノ）！！
アンジェリーナの記憶を戻すべく、モンスターの都に連れていくこ
とに！

いなくなったアンジェリーナを追い船に乗る村人！！
乗り込みたるは設備充実、憂いなしの豪華客船タイタニック号。
海上クラブオーナー「クロコダイン」登場！！
お調子のクロコダイン！
しかし調子をこき過ぎて、いきなり吹っ飛んだ！！

――――――

穴からは凄まじい量の海水が、ガンガンに流れこんでくる。
巨体モンスターが突き抜けたサイズの穴だ。大破損である。

目の前の海水は、客たちの気を奪った。
クロコダインの身の心配なんて、誰も及ばない。
悲鳴が上がり、事態はあっという間に会場全体へ伝わった。
パニックになった。

ちなみに、初めに書くが、これが今回の沈没の原因ではない。
この巨大客船タイタニック号の全船体から見れば、蚊に刺された程度に過ぎない。
オレはこの日までの退屈しのぎとして、船内パンフレットを熟読していた。

この船タイタニック号は、「パーティションシステム」と呼ばれる防水機能を持っている。船体の破損による浸水から守るためのパーティション（区切る壁）が設備されているとあった。
そのパーティションをもって、浸水を遮断するわけだ。
「５０％までの浸水が許容可能」とパンフには記されていた。
要は、船の半分が水に浸かっても、航海は続行可能というのだ。
驚くべき船だ。

クラブのパーティーはここで終了。
流れ込む海水に、混乱はさらに混乱を招いて
誰もが我先にと逃げる事態になったからだ。最悪のお開きだ。
当初の計画は「エルフのお姉さまとお尻合いになる」だった。
が、この状況では計画どころではない。
綺麗なエルフのオネイさんたちは、びしょ濡れになって逃げ惑っている。ほぼ裸だ。
これにオレのスーパーコンピューター（脳）は即座に反応する。

このフロアが水で埋まることが、この巨大船に致命的な５０％以上になりうるか？
否。
まるで足りない。全体から見れば　１％にも満たないだろう。

「まだ慌てるような時間じゃない。」

仙道（陵南高校）さんなら、きっとこう言ってくれる。
この程度の破損ならセーフティ。かつ、まだ水量的にも安全圏だ。

「魚住っ！！　勝負勝負っ！」

田岡監督（陵南高校）なら、きっとこんな激が飛ぶだろう。
オレは呼吸を整え、足場を確認した。
たいした水量じゃない。走れるじゃないか。
命よりも大事な時がある。オレにとっては今なのだ。
このインターハイが、オレには全てなんだよ的な時が今だ。

オレは走った。　力の続く限り。
全力でびしょ濡れオネイさんたちを追ったんだ。
逃げ惑うふりをしながらに追いかける。
全員の裸を、親の仇のごとく目に焼き付けた。
流れるヨダレもそのままに。。

破損した箇所から、何かが流れこんできた。
水中に投げ出されたクロコダインだった。
抜けた穴まで泳いで、自力で船内に戻ってきたらしい。
しかし、たどり着いたが最後、その姿勢のまま

動けないようだった。近くに助ける人は誰もいない。
我々が助けねばならないだろう。
クロコダインが起こしたとはいえ、オレのイタズラから起こった事件だ。
悪ふざけが過ぎた、と言えるかも知れない。オレも悪かった。
1人では手を貸せないので、サマヨウヨロイを探した。

サマヨウヨロイは、少し離れた地面に倒れていた。
両腕は左右反対のままだ。サマヨウヨロイの鎧は、着位置を間違えている時
その箇所は動かない。先のオレのイタズラのままの状態で、倒れたのを最後に
立てなかったようだ。少し長い間、水に浸かっていたことになる。
サマヨウヨロイは動いていない。最悪の不安がよぎった。

急いで起こし、生存を確認した。
大きく一息つき、動き始めたので、ほっとした。
腕も元に戻してやった。オレは心配の後の喜びからか
「床からパンツが見れるチャンスだったな」
なんて下らない冗談を口走ってしまった。

「いや、パンツどころか、もっと。。」

急に興奮しながら、サマヨウヨロイは話し始めたんだ。
この状況で、本当に変態行為に及び、おおいに楽しんだというのだ。
キモい。
そのまま放置すれば良かったと後悔した。

クロコダインを起こす。手を貸し声をかけた。

「豪傑よ・・・・！！参ったっ・・・・！！」

クロコダインは、サマヨウヨロイに感服している様子だった。
また、オレをそのサマヨウヨロイを手飼いにする主人と間違えているらしく
「主様（あるじ）」と呼ぶほど弱っていた。

出口を探す。パーティションシステムは、もう作動している。
来た時にはない壁が、あちこちに見られた。自動で閉まっていくらしい。
来た道では帰れなくなっていた。まずい。
広く、迷路のような大船内である。焦りを感じざるを得ない。

抜け道が、必ず作られるように、パーティションは閉まっていくという。
浸水を巧みに制御し、経路を確保すると船内パンフレットに書かれていたことを思い出す。
落ち着いてよく見れば、【出口はこちら】とある電灯が点滅している。
ナビゲーションしてくれているではないか。

ずぶ濡れにはなってしまった。
服は着替えを買えばいい。オレには金がある。
この頃は、そう思っていた。
冠を売った大金が、サマヨウヨロイの銅には入っていた。
お馴染みのサマヨウヨロイの金庫スタイルだ。

足場に水はないところまで、クロコダインを連れてきた。

遠くに、この騒ぎに集まったヤジウマが見える。もう安心だ。
死にかけ、一命をとりとめた安堵感からか
クロコダインは感謝のあまり「友よ友よ」とうるさかった。

運の良かったのはここまで。
いや、今思えば全然ついてないか。充分、不幸だ。
しかし、大不幸は、忘れた頃に、やってくる。

ヤジウマの中から、1人小さなモンスターらしいのがこちらに向かってきた。
クラブ・クロコダインの関係者だと思った。
オーナーを引き取りにでも来たのだろうと。顔は見えない。
大きなマントのような服装に、身を大きく隠すようだった。

かなり近づいてきたあたりで、人間であることが分かった。
この船はモンスター船で、人間は数えるほどしかいない。
何者か。用はオレにあるのかも知れない。
と思った次の瞬間、体は動かない。顔がしっかり見えたからだ。
近寄り、放った言葉を、その恐怖を、オレは今でも忘れない。

「また会ったね、兄さん」

現れたのは
金庫に閉じ込めたはずの魔法使いのジジィだった。。。。

次回へつづく

冒険の書２７　体臭ツートップ

前回までの村人の日記は……
勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人。

だが、勇者殺害現場にいたアンジェリーナの記憶が
なくなっていた事実が判明！

原因は村人の使ったキエサリ草（偽モノ）！！
アンジェリーナの記憶を戻すべく、モンスターの都に連れていくこ
とに！

いなくなったアンジェリーナを追い船に乗る村人！！
乗り込みたるは設備充実、憂いなしの豪華客船タイタニック号。

海上クラブで、変態行為を働く村人！！
そんな村人の前に、金を奪われた魔法使いが現れる！！
村人に天罰は下るのか！！

ーーー

強欲な元勇者の仲間。
以前に、オレ達の金を奪った魔法使いのジジイが現れたのだった。
オレは金庫売りに成り済まし、金を取り戻した。
その際、ジジイの金狂いを利用して、金庫に閉じ込めたはずだった。

どうやって殺そうか―ジジイの目は冷酷に光る。
年老いたジジイのする目じゃない。
報復を喜ぶ、残忍に歪んだ目だった。
恐怖に体はすくんで、動けない。

並みのジジイじゃないのだ。世界を制した勇者の連れ。
手をかざすだけで、凍らされた奴もいた。
並の人1人、その魔法を使えば何とでもできるだろう。
カエルからみえる蛇。理屈ではない。
肌に感じる絶対的力量差だけで、充分に死ねる。

「金、あるんです！」

とっさに言った。体は、自然に地面へとかがんでいた。
勘違いしないで欲しいのだが、これは我が身惜しさの
土下座とか、命ごいとか呼ばれる、そういうのではない。
簡単に命を捨ててはならないからだ。
これからの国家の稼ぎ手となる、若者のオレが死んだら
誰が年金を払うのだ。誰がお年寄りを守るのか。
そういう国的な問題から、オレはオデコを地面につけた。

オレがジジイより取り返した金は、５万ゴールドほどだ。
そんな５万なぞ、とっくに消えている。しかし今は違う。
ロマリア王の冠を売った金が、５万ゴールド以上あるのだ。
ここで、圧倒的閃きはくる。

お金を預かってあげたことにしよう。
さらには増やして上げたことにしようと。
オレの訳を説明した。

「実は・・・こうです。
金庫の手違いで開けられなくなり、無防備な外のお金を
一時、預からせて頂きました。
それから、勝手とは思いましたが
ただ資金を預かるだけでは、能がないと思い
優良な企業に投資などしまして、少々増やし
７万ゴールドまで増やしました。。。」

実際は９万ゴールド以上ある。
７万は渡して、２万残す。圧倒的経済感覚。
この辺りに、高度なテクニックを入れてくるところは
我ながら見事である。
ジジイの目の残忍光度は、確実に弱まっていた。
効果ありだ。いける。

「９万７５３２ゴールドありますよ」

そばにいたバカが、口を出した。サマヨウヨロイだ。
そして、聞いてもいないのに、自分の「貯金箱機能」について

誇らしげに説明をしだした。
なんでも、自分の体の中に入っている金額を
正解に計算できるらしい。
いらん。全く、必要ない。
こうして、いらない機能を持つ、いらないヨロイは
オレの策を見事に台無しにしたのだった。

空気の読めない鉄クズのせいで、全額はばれた。
しかし、話を聞いて魔法使いのジジイの目の色が変わっていた。
ここまで金を増やした話に、利用価値でも見たのだろう。
殺されずには済んだが、オレ達は捕らわれの身になった。
不幸なことに、居合わせたクロコダインまで捕虜になったのだった。

クロコダインは事態を察すると
オレ達を助けようとなのか、暴れようとした。
オレの命がけの交渉中に、しきりと耳元で

「ここは私に任せろ」
「私に任せれば」

などと、話かけてきてうるさい。
この場をなんとかする、というのだ。

敵の力量の図れない素人は、これだから困る。
下手な刺激など、逆効果なのだ。
そしてついに、魔法使いのジジイに、襲いかかってしまったのだった。

足止めにもならなかった。
瞬間に、大きな炎に包まれ、クロコダインは真っ黒にコゲた。
オレは、そんなクロコゲインをさっさ回収し、おとなしく捕虜になった。
それからオレたち三人は、暗く狭い、船の機関室のような部屋に閉じこめられた。

「オレは関係ないのに」

クロコダインは、しきりに愚痴っていた。
関係を持とうしたのは、クロコダイン本人だ。自業自得である。

どのくらいの時間が経ったのか分からないが
1日以上は閉じこめられていただろう。
魔法使いのジジイの姿は、ない。
当然だが、別室でくつろいでいるのだろう。
とりあえずオレは、一命を拾い得た安堵感でいっぱいだった。

しかし、ここでもオレの命は狙われる。

機関室とは、船の動力を作るエネルギー炉で
とにかく暑い。そんな暑い部屋に、三人の男が、閉じこめられているのだ。

サマヨウヨロイの体臭がキツイのは、前にも書いた。
それだけに厳しいはずなのに、この猛獣のような男
クロコダインの体臭が、これまた厳しい。完全に野生動物のそれだ。

この二人の体臭王のブレンドに、なんで堪ろう。
筆舌に変えがたい、この地獄の悪臭は、確実にオレの命を削っていた。
なぜならば、オレの体がおかしい。痙攣が止まらないのだ。
臭すぎて、身体が非常警報を発している。異常事態だ。
意識もまた徐々に、遠のいていくのがわかった。
これは、もはや事故だ。

「絶望に負けるな！」

「必ず助かる！」

クロコダインやサマヨウヨロイのかける声が聞こえる。
腹がたつほど、気がついてない。憎さは倍増だ。
ついには、あまりの臭さから体が倒れそうになった。
瞬間、クロコダインの身体が寄ってきた。

わかっている。
助けようとしてくれた、クロコダイン。
支えようとしてくれたのだ。
しかし、現実には、殺人的な臭いの「源」が寄ってきたわけで。。。
濃度１００％のソレは、あまりにも限界だった。

「オマエがっ！臭いからっ！
こうなってるわけだからっっ！！」

心身ともに弱っていたオレは、余裕もなく、配慮もできず
本音をぶちまけてしまった。社会人として、失格である。

その後クロコダインは、黙って下を向いていた。
心からすまない、クロコダイン。

それを見ていた、サマヨウヨロイの肩が揺れている。
笑っているらしい。相変わらずの、最低ぶりを発揮している。
臭いの半分は、お前だと怒鳴ろうとした瞬間だった。

天井から音がした。
何かと様子をうかがっていると、細い隙間から
青と緑の２つの物体が動いていた。

スライムとキャタピーの「たつお」だった。
不審を感じて、探していたらしい。
よく見つけてくれた。俺たちの感激は、いうまでもない。
本当に、頼りになる友だ。
訳を話して、閉められている扉を開けてもらうつもりだったが
うまくいかなかった。

単純な施錠ではないらしい。
何か、魔法で強力に封じられている、というのだ。
確かにサマヨウヨロイや、クロコダインの怪力にもビクともしなかった。

ジジイが来るまで、待つしかない。
チャンスは、魔法使いのジジイが来たそのときしかない、とスライムは言い
ある策をオレたちに授け、スライム達は離れていった。
準備をして、ジジイがくるのをひたすら待つことにした。

やがて音が聞こえてくる。歩いてくる音だ。

しばらくすると、扉がガタガタと揺れだした。
ジジイがきたのだ。
オレたちの心臓が高鳴る。
皆で目をあわせ、呼吸を整えた。
扉は、ゆっくりと開いていった。

次回へつづく

冒険の書２８　百害あって一利だけあったみたいな

前回までの村人の日記は……
勇者殺害事件はスライムのおかげで
事なきを得た村人。

だが、勇者殺害現場にいたアンジェリーナの記憶が
なくなっていた事実が判明！

原因は村人の使ったキエサリ草（偽モノ）！！
アンジェリーナの記憶を戻すべく、モンスターの都に連れていくこ
とに！

いなくなったアンジェリーナを追い船に乗る村人！！
乗り込みたるは設備充実、憂いなしの豪華客船タイタニック号。

そんな村人の前に、勇者の連れの魔法使いが現れる！！
囚われた村人！！しかし、脱出を図ることに！！
授けられたスライムの秘策とはいかなるものか！！

――――――

ついに、魔法使いのジジイはきた。
扉の前で念仏らしきものを唱えている。
やはり、扉は固く魔法で封じてあったらしい。
囚われのオレ達は、息を潜める。

待ち構えていた。
スライムから与えられた脱出作戦。
扉の空いた一瞬に、勝負をかける。命をかける。
次第に空いていく扉。ジジイの姿が見えてきた。
この時のジジイの一言がこれだ。

「毒か」

部屋に充満した体臭のことである。毒って。
臭元のクロコダインが傷ついたような顔を見せていたのが、なんとも痛ましい。
その中で呼吸をしてきたオレ。良く生きていた。

この体臭は、こちらが仕掛けた毒として、敵意として扱われた。
まっこと、害しか生まない体臭である。
こちらの準備を察し、魔法使いのジジイは身構えてしまった。
不意討ちのはずが、先に知れる形になってしまったのだ。最悪。

しかし、中を見た時、ジジイはぎょっとしたはずだ。
3人のはずが、2人しかいない。
しかも、2人ともサマヨウヨロイなのだ。

マネマネの実というアイテムがある。
触れた相手に変化してしまう不思議な薬草だ。助けに来たスライムが持ってきた。
それにより、オレとクロコダインはサマヨウヨロイと変化していたのだった。

消えたもうひとりのサマヨウヨロイとは。
天井である。ちなみに、これがサマヨウヨロイ本物だ。
ジジイが入ってきた瞬間に、上から襲いかかった。
相手が驚いた瞬間の油断。死角からの攻撃。
虚をつく。毎度ながら、兵法の基本である。

「食わんっ！！」

しかし、魔法使いはヒラリと交してしまった。
相手は、百戦錬磨の勇者の仲間である。
こちらの策を受け流してしまった。

「ゴミどもが」

いい放つ魔法使いのジジイ。
落ちてきたサマヨウヨロイは、魔法で動きを封じられてしまった。
魔法使いは失笑していた。
完全な失敗。やはり敵わなかった。
オレたちは絶望に落ち込んだ。

実は、スライムに授けられた作戦の本番はここからなのだ。
スライムの話。
金はまだ、サマヨウヨロイの中に入っていた。
魔法使いの大事は、金であってオレ達ではない。
欲深い金狂いのジジイは、サマヨウヨロイ（金）を
苛烈に攻撃はできないだろうということ。
金を破損しては何にもならない。
サマヨウヨロイには価値はないが、中身は大金なのだ。

サマヨウヨロイに扮したオレとクロコダインは
命をあきらめたと見せかけて、突如として襲いかかった。
ここにも、策は施されている。
オレとクロコダインの身体には、金を至るところに挟んでいる。
どれが金を持つ本物か、紛らわすためだ。
これがスライムが立てた策だった。

オレ達の偽りの降伏に、魔法使いは油断していた。
金を撒き散らし、躍りかかる2匹のサマヨウヨロイと化したオレと
クロコダイン。
散る金に、どれが本物の金を持つサマヨウヨロイなのかの見極めに
さすがに魔法使いも、視線を多くに奪われ、慌てた。

先に動いた、クロコダインの一撃が襲いかかる。
片方の手で、サマヨウヨロイを魔法で制している魔法使いのジジイ。
だがなんと、空いたもう片方の手をかざし、クロコダインの攻撃は
防せがれた。
さすがは勇者の連れ。だがやはり、読み通り大事は金。極魔法は使
わない。
動きを封じる程度だ。
両手をふさがったジジイの胴はがら空きだ。

ここに渾身のオレの一撃をクリティカルヒットさせる。
はずだった。

「殺す」

言ったわけではない。ジジイがオレを睨みつけた。
何万ものモンスターを、葬ってきた魔法使いなのだろう。
その目力から伝わる殺意は、圧倒的だった。
恐怖に、体はすくんで動けない。完全に気を飲まれてしまった。

「ひるむなっ！！村人っ！！」

突然、飛び出してきた青いイナズマが叫ぶ。スライムだ。
隠れて見ていたらしい。
猛烈な勢いで、魔法使いへ突っ込んでいく。
これに勇気づけられ、オレは目をつぶり
言葉とも言えない声を上げ、魔法使いへ突撃した。

オレとスライムは、同時に魔法使いへ体当たりし
勢いのままに、自分もろとも倒れこんだ。
封じられていたクロコダインとサマヨウヨロイも絡まったまま
魔法使いのジジイを下敷きに、なだれこんだ。

「逃げれっ！」

誰が言ったか分からない。皆、すぐさま起き上がって走りだした。
サマヨウヨロイもクロコダインも魔法から解放されていた。
さすがにモンスターたちは敏捷だ。早い。
魔法使いの姿を確認する暇もなく、オレもすぐさま起き、走り後を追った。

「逃がさん」

なんと魔法使いのジジイは、走るクロコダインの背中にへばりついていた。
恐怖は終わらない。しかし、なんという執念か。
これが老人の体力とは思えない。

「オレを置いていけ」

クロコダインは叫んだ。
クロコダインと魔法使いのジジイは、体勢を奪いあっている。
さらに先を行った、サマヨウヨロイとスライムの姿は見えなかった。
つまり、オレを助けようとしたクロコダイン。

見捨てるほど、オレも腐ってはいない。
オレはとっさにクロコダインの脇に指を突っ込み、その指を魔法使いの鼻に突っ込んだ。
クロコダインの脇は、あの地獄の体臭の源。あそこが特に、一番臭いことを身をもって知っていた。

地獄の体臭の武器となった、オレの右手は死んだ。
だがそれと引き換えに、魔法使いのジジイを失神させることに成功した。

窮地を抜け出し、オレ達は我を忘れて、無我夢中に、逃げに逃げた。
その辺りの必死さは、その後しばらくの記憶があまりないほどだ。

しばらくすると魔法使いのいる方から大爆発が起きたんだ。。。。

次回へつづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2606f/

ドラクエ ある村人の日記 〜 渡る世間はアレばかり 〜

2010年10月12日13時47分発行